
シークレットゲーム ~ lost lifeline ~

list

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シークレットゲーム ↗ lost lifeline ↗

【NZコード】

NZ5270

【作者名】

list

【あらすじ】

シークレットゲーム、キラークイーンの一次創作です。

総一と咲美はオリキャラにチェンジ。

それ以外のキャラは原作通りです。

ルール等は、多少の変更点があつたりしますが基本的には原作通りです。

四話と五話と一話にまとめました。
それ以外にも一部、加筆・修正しました

第一話 lost lifeline (前書き)

原作と異なる点

- ・総一と咲美がオリキャラにチエンジ
- ・PDAに記載されているルール3の書き方が原作と異なる（ルール3の内容 자체は変わっていない）
- ・ルール4に追加内容がある
- ・原作には登場しなかったソフトウェアがある…かもしれません
- ・誤字脱字が目立つたり、スペースの取り方で見にくかつたりするかもしれませんが、気付いたことがあればどひつせんじ指摘下さい。
- また、文章力が未熟で目に余るかとは思いますがご容赦下さい。

第一話 lost lifeline

少年、相川幸貴が意識を取り戻し、最初に目にしたのは灰色の壁だった。

自分の部屋ではない、まさそつと思つた。

仰向けに寝ていた体を起こすと、ここが見知らぬ一室だということが分かつた。

自身が寝かされていたベッドも初めて見る物だ。

ベッドから体を出し、立ち上がり、全体を見回す。

相川は部屋を見回すまでは、病院にでも運び込まれたのかと考えていたが（運ばれるような心当たりも無かつたが）、すぐにそれが間違いだと気がつくことになった。

部屋の広さは十畳程度で、部屋自体は灰色のコンクリートに囲まれていて窓一つ無い。

蛍光灯のおかげで暗くは無いが、部屋全体が淀みのある光で包まれているような印象を受ける。

部屋にあるものと言えば、相川が先程まで寝ていたベッドと、簡素なデスクくらいで極端に殺風景だ。

こんな部屋が病室であるはずも無い。

そもそも、相川にはここが何の為の部屋なのかも想像出来ない。

また、自分がこの部屋いる経緯も理由も理解出来ないでいた。

そもそも、どうして意識を失っていたのだろうか？

混乱しかけている頭に鞭を打ち、状況を整理する。

田を覚ます前の記憶は学校からの帰り道で途切れている。

こんな訳の分からぬ所に向かう予定なんて無かつたし、寄り道せずには帰っている筈だった。

なのに知らない間に意識を失っていて、気付けば……この部屋だ。

ということは、自分の意思でここに来たのではなく、学校から家へ向かう途中で何者かにここに連れて来られたのだろう、相川はそう判断した。

この、病院でもなければ自宅でも無い、不気味な一室に。

そう考えた時、相川は初めて自分が置かれている状況が決して楽觀出来るものでないと悟った。

「誘拐」……。

理由や目的は分からぬが、どう判断すべきだ。

しかし、それは言つても実感が湧かない。

危機感もやつて来ない。

相川にとつて誘拐なんてものは自分とは一切関わりない、別の次元で起じるような出来事の筈だった。

それが急に自分の身に降りかかりました、などと言われても、まるで現実味が感じられない。

だが、今の状況を考えればその別次元の出来事の渦中に放り込まれたと判断するしかない。

現状を正しく認識しなくては正しい行動はとれない。

自分ハ…… ユウカイ…… された。

自分は…… 誘拐…… されたのだ。

そつ無理にでも自身に言い聞かせるとようやく少しばかりの現実感と危機感が沸いてきた。

これでいい。

いつももして、危機感と現実感を持たなければならぬ。

さて、これからどうすれば、と思案していると部屋の隅のデスクの上にある見慣れたスクールバッグが目とついた。

デスクに近づき、バッグ中身を確かめると、それが確かに自分の物であることが分かった。

中身は、記憶が途切れる寸前の物と一切変わっていない。

つまり、相川をここに連れて来た人間は「」寧に荷物をそのままの状態で相川の寝ている部屋に持ってきたことになる。

妙に親切だ、そう思わざるを得なかつた。

普通の誘拐ならこんなことはしないだろつ。

相川は、益々自分の置かれている状況が掴めなくなつていた。

とりあえず、バッグを担ごうとデスク上から持ち上げると、バッグの陰に隠れていた財布と携帯電話に気付いた。

どちらもここに来る前には制服のポケットに入っていた筈の物だ。

携帯電話こそ、圈外で通信を行えない状況だったが、財布の方はスクールバッグと同様に中身には手出しされていなかつた。

親切過ぎる、と相川は内心で苦笑した。

相川は財布と携帯電話をズボンのポケットに入れ、バッグを肩に掛け、軽く部屋を見て回る。

大した広さもない部屋なのですが調べ終えた。

どうやら先ほど見つけた荷物以外には特に何も無いよつだ。

これ以上この部屋に居ても仕方ないと判断し、唯一の出入口であるドアに向かつた。

普通に考えれば外から施錠されている。

何せ、相川は誘拐されてここに居る筈なのだから。

だが、万が一ということもある。

相川は薄い望みだとは分かりつつもドアノブに手をかけようとする。

しかし、手がドアノブに触れる前にドアノブが急に回転し、扉は相川の向こう側へと吸い込まれた。

ドアが開いたのだ。

ドアの向こうに立っていたのは学生服を着た少女だった。

相川と目が合ひ。

少女の体は170cmの相川よりは一回り小さく、痩せている訳でも太っている訳でもなく、女性にしてはやや短めの黒い髪。

大きく開かれた瞳が印象的なその顔は、相川が中学生だった当時に毎日のように見ていた物だった。

少女がそのドアを開けるとそこには一人の少年だった。

紺色のブレザーを着ていて、一目で学生だと分かった。

身長は156cmの彼女より頭一つ高く、男性にしてはやや長めに切り揃えられた黒髪。

スッキリとした輪郭に目鼻立ちの整ったその顔には見覚えがあった。少女は相川を見ると、キヨトンとした表情を浮かべたまま、口を開いた。

「あれ、幸貴くん！？」

「な、中瀬さん！？」

相川は困惑した。

ドアが開いたこと自体、予想外だった。

それに加えてまさかこの場で見知った人間と出会うこと夢にも思わなかつたのだ。

そんな相川とは対照的に『中瀬』と呼ばれた少女の表情は一気に明るくなつた。

「やつぱり幸貴くんだー、どうしてここにー？」

中瀬は飛び跳ねるように相川に近づき、出合った直後は30ほどあつた二人の距離は10弱までに縮まった。

「いや、俺は気づいたら」「……」

「私も何だか知らない内に連れて来られたみたいなんだ

「中瀬さんも同じ……か」

「同じと言えば、幸貴くんも首輪着けてるんだね」

「首輪つけて?」

「え? 幸貴くんも巻いてるじゃん、銀の首輪」

相川は中瀬が何を言つてゐるか分からなかつたが、自分の首に手をあてると確かに自分の首に金属製の物が巻き付いてゐるのが分かつた。

言われるまで全く気付かなかつたが一度気付くと、むしろ何故今まで気付かなかつたのかが不思議に思えた。

見れば、中瀬の首輪にも銀色の首輪が巻かれている。

おわりに相川の首輪と同じ物だろ?。

首輪は首のサイズに完全に合わせてある上に、金属製であるため、力尽くで外すのは厳しそうだった。

「確かに、二人とも首輪が付けられてるけど、これって何の為に…」

何の為に、という疑問を挙げればキリが無い状況ではあったが、相川はこの首輪の存在に特に嫌な感じがしていた。

「何の為かは私もよく分かんない。何の為なんだろうね、この首輪も、建物も」

「とりあえず、この部屋から出よう。ここに留ても仕方ないしさ。俺には中瀬さんの言つ『建物』もよく分からない」

「そうだね、まずは探索だよね」

一人は部屋を出る」とした。

部屋を出ると、そこも灰色の壁に囲まれた空間だった。

人が五、六人横に並んで歩けるくらいの通路が続いている。

「中瀬さんはどの道を使って来た?」

「えーと、確かにあっちからかな」

やや自信満々そう」「あっち」とされる方を指差した。

「あっちには何かあった?」

「基本的には何にも無かったよ。たまに部屋があつたけど、中には特に何がある訳でもなかつたし」

「じゃあ、行こうか

相川は言いながら中瀬の差した方とは反対方向に歩を進めた。

中瀬もそれに続く。

しかし、「三歩進んだ所で相川が急に足を止めた。

「どうかした？」

中瀬が当然の疑問を口にする。

「いや、ちよっとね」

相川は振り返りながら返事をして、肩から下げるバッグから一枚のルーズリーフとセロハンテープを取り出した。

そのルーズリーフを手で小さく切り分け、テープでその破片の一つを先ほどまで居た部屋の扉に張り付けた。

「何してるの？」

「いや、田印にと思って。何せこの迷路みたいな建物を地図無しで移動する訳だから

「やうだね、それでもしないと迷っちゃうよね

「じゃあ、行こうか

一人は再び歩き始めた。

相川達は歩き始めて5分と経たない内に一つの人の姿を見つけた。

一人は男性、もう一人は女性だろう。

相川達とは50m以上の距離がある。

向こう側に立ちに気が付いたらしく、こちらに向かって歩いて来る。

「どうする？」

言われると中瀬はその場で立ち止まり考え込んだ。

それに合わせるように相川も歩くのを止めた。

「うーん、ここで幸貴くん以外の人と会うのは初めてだから何とも言えないけど。でも誰かと話さなきゃ進まないし、私は話してみたいた」

「分かった、そうしよう」

元々、相川自身もそのつもりだったし、彼女がそう答えるのにも察しがついていた。

わざわざ訊いたのは確認の為だ。

一応、あちらの二人が相川や中瀬を誘拐した人間である可能性もある。

しかし、中瀬が違つた以上そうでない可能性も同じくらい有るだろう。

たとえあの二人が誘拐犯だつたとしても、相川達をここまで自由にさせてきた人間だ。

今さらになつて急に危害を加えてくるとは思えなかつた。

ならば話してみるのが得策といつものだらう。

相川達も向こうの二人に向かつて歩き、互いの距離が声の届くぐらに近づくと、向こうの二人は歩くのを止め、男性の方が声を張つて呼び掛けってきた。

「こちらは争う氣は無い。出来れば話し合いをしたいんだが」

相川がそれに応じる前に、「こっちもでーす！」

と、中瀬が手を大袈裟に振りながら必要以上に大きな声で返答した。

こちらを警戒させない為か、それ以上向こうからは近づいて来なか

つた。

相川達から彼らとの距離を詰め、その距離は自然に会話するに不自由無い距離にまでなった。

見ると、男性も女性も相川達と同じ首輪を付けていた。

「あなた達も知らない間にここに連れられたんですか？」

「ああ、そうだ。だから警戒しなくて良いんだ。僕も彼女も気付いたらこの建物だったんだ。君達もそうだろう？」

相川の質問に答えたのはワイヤーシャツ姿の男性だった。

話し方に角がなく、人柄の良さが伺える。

どうやら本当に誘拐犯では無さそうだ。

安堵する相川と中瀬。

「良かったね、幸貴くん。私達と同じ様な人と会えてさ

心底嬉しそうな中瀬に相川は頷き返す。

「それはこっちも同じだわ。ねえ、おじ様」

「ああ、全くだよ」

傍らの女性に『おじ様』と呼ばれた中年男性は軽く頷き、とにかくで、と相川達に話を振った。

「君達は現状をどうまで把握しているのかな？」

「ほとんど分かってません。首輪のことは、この建物のことは

相川は素直に返答した。

「じゃあ、まずは情報交換よね」

「あ、その前に血口紹介しませんか？」

中瀬がやや遠慮気味に提案する。

「それも、そうね。私は陸島文香。職業は……まあ、見ての通りって感じかしい」

陸島と名乗ったのは受付嬢のよつた格好をした20代半ばくらいの女性だった。

「僕は葉月克己。どうでもこのサラリーマンって感じかな

『おじ様』は葉月と言ひしき。

「中瀬美那つていいます。高校一年です

「相川幸貴。高校一年です」

「うふ、美那ちゃんに幸貴くんね。それじゃあ、血口紹介も終わつたし情報交換と行こうかしい」

「一人とも、いつのものが部屋にあったと思つんだけど」

葉月はポケットから手のひらサイズの電子機器いしき物を取り出した。

「それ、スマートフォンってやつですか？」

「いや、確かに携帯電話にも見えるがPDAと言つらじー

「もしかして、これの事かな？」

中瀬は肩に掛けたスクールバッグから葉月の言つ『PDA』を取り出した。

「ああ、それで間違いない。相川君、キリも同じような物が部屋にあつただろう?」

「いえ……有りませんでしたけど」

相川が返すと、葉月の表情が曇つた。

文香はひどく驚いた様子で相川に迫る。

「ちょっと幸貴くん、それ本当なの?」

「え、ええ。俺が最初に居た部屋にはバッグと携帯と財布しか有りませんでした。それにバッグの中も確認しました」

「そつ……。でも、見落としている可能性もあるし、とにかく幸貴君のいた部屋に行きましょ」

「さあ、幸貴君の部屋に行きましょ」

その声にはつい先ほどまであった余裕は消え失せていた。

相川には文香が何故あんなに必死になるのか分からなかつたが、とりあえず自分の居た部屋へ案内することにした。

目的の部屋はそこまで離れておらず、また目印を付けていたのも幸いして直ぐに見つかった。

四人は部屋に入ると、PDAの搜索を開始した。

ベッドの下や毛布の中、デスクの裏、考えつる場所を隈無く探したがPDAが見つかることは無かつた。

「困つたわね。本当に無いなんて」

文香と葉月の表情は暗く、まるで人の死を憐れむかのようだつた。

「そのPDAってそんなに大事な物なんですか?」

相川にとつては勝手に驚かれたり、落ち込まれたりで訳が分からなかつた。

ふー、と息を吐いてから文香が口を開いた。

「幸貴くん、実は私達がここに連れて来られたのはある『ゲーム』をするためらしいのよ」

「ゲーム……ですか」

中瀬と会つ前から妙な誘拐だと思つてはいたが、まさかこの状況が『ゲーム』の為のものなどとは想像していなかつた。

しかし無理やり連れて来た人間をこんな風に放つておくような状況だ。

「『ゲーム』の為」くらいでしか説明がつかないのも確かではある。その為か、相川はこの状況がゲームであるという話をすんなり受け入れることが出来た。

「そのゲームのルールがこのPDAには書いてあるの。そして、緯は後で説明するけど私とおじ様はPDAに書かれたルールが真実だと践んでいるわ」

はい、と相川は先を促した。

「その内の『ルール5』をまず読み上げるからよく聞いてて」

文香の読み上げた『ルール5』の内容は以下の通り。

（ルール5）

侵入禁止エリアが存在する。初期では屋外のみ。侵入禁止エリアに侵入すると首輪が警告を発し、その警告を無視すると首輪が作動し警備システムに殺される。また、2日目になると侵入禁止が1階から上のフロアに広がり始め、最終的には館の全域が侵入禁止エリアとなる。

時間制限と行動範囲の限定というゲームにはお決まり制約だ。

問題なのはペナルティ。

首輪が作動し警備システムに殺される

「一、殺されるつて……」

中瀬の声が少し震える。

「ええ。これは命懸けのゲームなの」

相川は強制的に参加させるようなゲームなんて口クな物ではないだろうとは思っていた。

だから命懸けと言われてもあまり動搖しなかった。

誘拐された人間の命なんて弄ばれて当然の代物だ。

「でもそのルールを聞く限り、首輪を外さないと時間が来たら殺されますよね？外す方法はルールに無いんですか？」

「首輪の解除の方法は『ルール1』に書かれてるわ。今から読むわよ」

文香の読み上げた『ルール1』の内容は以下の通り。

（ルール1）

参加者には特別製の首輪が付けられている。それぞれのPDAに書かれた状態で首輪のコネクタにPDAを読み込ませれば外す事ができる。条件を満たさない状況でPDAをよみこませると首輪が作動し、15秒間の警告を発した後、建物警備システムと連携して着用

者を殺す。一度作動した首輪を止める方法は存在しない。

それは、自分のPDAを持たない相川にとつてはあまりにも残酷な
宣告だった。

第一話 「情報」

72時間以内に首輪を解除しなければ、死。

首輪を解除するにはPDAに書かれた条件を満たした上で、首輪にPDAをコネクトする必要がある。

「つて事はアレですね。PDAを持たない俺はこのままじや首輪が作動してゲームオーバーになる」

相川の口調は随分ゆつたりとしていた。

「ちよつと幸貴くん、状況が分かってるのー?」

相川の口調からは危機感というものがなく、文香はそう思つと大声を出せざるを得なかつた。

「ちゃんと分かつてゐつもりです…。それより文香さん、他のルールも分かりますか?」

文香にはまだ言いたいことがあつたがそれを飲み込んで相川の要求に応えることにした。

文香は胸のポケットから小さく折り畳まれた紙を取り出す。

「一応、この紙に全てのルールがメモしてあるわ

「[印]せてもらつてもいいですか?」

「構わないわ」

相川は文香から紙を受け取ると、バッグからペンとルーズリーフを取り出し、それを写す作業に入った。

相川とて命綱とも言えるPDAが無い状況を楽観視している訳ではない。

ただ、本来はゲーム参加者には全員に配られるであろうPDAが自分には無かつたという事がどういう意味を持つかはハッキリしていない。

落ち込むのはまだ早い。

「で、でもこのルールが本当かどうかなんて分からぬじゃないですか」

中瀬の言つ通り、そもそもこのルールの信憑性も分からぬのだ。

相川には悲観的になるよりも先にやらなければならない事がたくさんある。

「確かに、美那ちゃんの言い分も」もつとも。でも、せつかも言つたんけど……」

「そのルールが本当だという根拠があるんだ」

文香の言葉を引き継ぐように葉月が続いた。

「実は、僕と文香くんは相川くんや中瀬さんと会う前に色々人と

会つてゐる。少し長くなるが大事な話だ。しつかり聞いて欲しい」

「はい、と返事を返す中瀬。

作業こそ止めないが、葉月を見て首を縦に振る相川。

二人の反応を確認した葉月は、軽く咳払いをして続けた。

「僕は田を覚ました後、すぐに建物の探索を開始した。もちろん、PDAを持つてね」

その言い方はPDAを持たない相川に対する皮肉のようにも聞こえる。

そう感じた葉月は、「ああ、すまない。皮肉のつもりじゃないんだ」と付け足した。

「探索を開始してから10分くらいしてからだつたかな、この建物で初めて人に会つたのは。郷田さんつていう40歳くらいの女性ですね。彼女も首輪をしてたし、一緒に行動することになつたんだ。そうして、一人で歩いているとね、あることに気づいたんだよ」

「ある事、ですか」

相川がペンを止める。

「ああ、実はこのPDAにある地図なんだが……」

「地図?」

中瀬は自分のPDAの画面に田を落とす。

「多分、『地図表示』つていう欄があると思うんだが。それにタッチすれば地図が表示される」

「これ……かな？」

中瀬がPDAの画面に人差し指で触ると画面が切り替わった。

その画面は地図といつよりも迷路といつ方が相応しいように思えた。

地図によるところの建物は六階建でらしい。

「その地図はこの建物の地図だ、かなり歩いて確認したから間違いないと思つ。現在地も確認できる」

「えー、と感心したよつて感づく中瀬。

「話を戻すけど、その後、僕と郷田さんはこの地図の意味に気付いてすぐにまた別のゲームの参加者に遭遇したんだ」

「文香さんですか？」

「いや、漆山という僕と同じくらいの歳の男の人でね、彼も首輪をしていた。それから三人で行動することになつて30分くらいしてからだな、漆山さんが落とし穴に引っ掛けたのは

「落とし穴？この建物ですか？」

「ああ、漆山さんの歩いていた床が突然無くなつた……いや、開いたんだろうね。彼が落ちてしまつ前に何とか腕を掴んだんだが、僕

と郷田さんでは彼を引っ張り上げることが出来なかつた。このままでは三人とも落ちてしまつ、といつ時に文香さん達が来て、助けてもらつたといつ訳を」

「そりだつたんですか」

「文香さんは手塚くんや麗佳さんと一緒に行動していたんだが……。なんでも、三人は下手をすれば命に関わるような罠を見ているらしい」

「命に関わる罠？」

「詳しいことは、本人から聞こつじやないか」

葉月は文香に視線を向け、説明を求めた。

文香はそれに応えるよつに頷き、話を始めた。

「私もおじ様と同じよつに、探索をしていたらまず麗佳ちゃんつていう子に会つて、その後に手塚つて男に会つたわ。三人で歩いていると、麗佳ちゃんが床の妙な出つ張りを踏んだみたいでね、そのせいで罠が発動つて訳」

「漆山つて人も何か罠を働くようなことをしたんですか？」

「いや、分からないな。その後の漆山さんは随分と気が動転していたし」

相川の疑問に葉月が答える。

「そうですか。それで、文香さん達が見た罠つていうのは？」

「壁から刃物が飛んでくるつていう代物よ。幸い、誰にも当たらなかつたけど運が悪ければ死人が出てもおかしくなかつた……と言えるわね」

「なるほど……地図は本物、仕掛けられた罠は命を奪いかねないような物もある。確かにルールは信じた方が良さそうですね」

相川にとつて、それは本来なら絶望的な現実のはずだが、そんなことは一切感じさせない物言いだった。

ルールが真実だとしても相川が生き残れないと決まった訳ではない。

（ルールが本当なら、その上で生き残る方法を探すだけだ。こんなゲームで死んでいられるか…）

活路はある。

「それで葉月さん、文香さん達と合流した後はどうしました？」

「漆山さんを助けた後は、六人でルールを教え合うことにしたんだ。ルール2にも書いてあるが、ルールは複数人が協力しないと集まらないからね」

ルール2の内容はPDA記載されているルールについてである。

このルールによるとルールは全部で9個。

それぞれのPDAに記載されているルールは4つ。

ルール1とルール2は全てのPDAに共通して記載されているらしい。

「ルールを教え合っている途中に長沢つて子が来て、結局七人でルールを交換したのよ」

「ルールを交換した後は？」

「ルール交換した後は皆バラバラになってしまったよ。我々のことが信用出来ないらしい」

「その後はずつと一人で？」

「いいえ、相川くん達と会う少し前に、かりんちゃんつて子に会つたんだけど、ルールを教えた後に別れたわ。私達は一緒に行動したかつたんだけど、彼女は一人で行動したいらしくてね」

「その後、相川くんや中瀬さんと会つたといつ訳さ」

葉月がまとめるように言った。

「そういうえば、美那ちゃん達は私達と会う前には何かなかつた？誰かと会つたり」

「俺は中瀬さんと会う以外は特に……」

「私は一人会いました、じゃないや、見ました、っていう方が正解かな」

「話はしていないの？」

質問する相川の手はペンを持ったまま忙しく動いている。

「うん、遠田で軽く見ただけ。あつちは私に気が付いて無かったと思うし」

「どんな人だった？」

「大柄な男の人だったと思うけど」

「美那ちゃん、もしかして帽子を被った金髪の男じゃなかつた？」

「いえ、金髪でもなければ帽子もなかつたと思いますけど…」

「やつ……。手塚じゃない、って事は私達の知らない誰かつてことかしらね、おじ様？」

「やつなるだらうね」

「まあ、これでお互いの情報交換は大方終了ね」

実際には交換というより、葉月と文香が一方的に情報を開示する形になっていたのだが…。

「文香さん、メモ貸して下せつてありがとう」やつこした

相川は筆記用具をバッグにしまい、借りていたメモを文香に返した。

全てを「写し終えたらしい。

相川はルーズリーフの内容を改めて読み返した。

ルールは1番から9番まであり、全てを完璧に把握するのは中々に骨が折れそうだった。

特に、ルール9はこのゲームの参加者13名全員の解除条件を記したもので、情報量は他のルールの比では無かった。

解除条件は、単に生き残るだけのものもあれば、PDA関係や首輪関係、他の参加者を殺害するといったものもあった。

ルールを簡単にまとめるど、この広い六階建ての館内で72時間という制限時間の中、13人の参加者が各自のPDAに書いてある解除条件をクリアするために殺しあったりPDAや首輪を奪いあつたりするゲーム、といつてらしい。

もちろん、これら以外の細かいことまでルールには記載されている。

相川がルールの内容に目を通していると、中瀬が斜め後ろから除き込もうとしているのが視界に入った。

彼女は未だ全てのルールを把握してはいないのだ。

それに気付いた文香は先ほどまで相川に貸していたメモ用紙を中瀬に手渡した。

「返さなくていいわよ、美那ちゃん。私はもう大体覚えたから

「あ、ありがとうございます」

「それにしても、これからどうする、相川くん？」

「どうするとは？」

相川はルーズリーフを内容を捉えていた視線を葉月に向けた。

「だつて、君は解除条件が分からんんだろう？」

相川はそうですね、と一言おいて

「でも、何とかするしかないでしょう」

と低く押された声で言つた。

一瞬のことだつたが、相川の瞳はこれまでに無い鬼気迫る色を帶びた。

「とりあえず、一方的なお願いで悪いんですけど……」

相川の表情からは先ほどの鋭さは無い。

「出来ればいいんですが、皆さんの解除条件を教えてもらいたいんですよ」

「僕達の解除条件を、かい？」

「ええ、俺は自分の解除条件が分からんのですが、自分のPDAが5のPDAかどうかだけは知つておきたいんです」

5のPDAの解除条件はこの六階建ての館内の指定されたチェックポイントを通過すること。

チェックポイントは基本的に5のPDAにしか表示されていない。

相川のPDAが5のPDAであつた場合、PDAを入手するのが一階が侵入禁止になつた後では一階のチェックポイントを通過出来ないので首輪の解除が不可能になる。

そのため、相川のPDAが5でない保証があれば自分のPDAを探すのをそこまで急ぐ必要は無いが、逆に5のPDAであるという可能性が捨てきれない内は自分のPDAを見つけることに全力を尽くさなければならない。

相川のPDAが5である確証があるかないかで随分と状況が変わつてくるのだ。

だからPDAが5でない確証を得るために他人のPDAの解除条件を確認したい。

他人のPDAの番号に5があれば自分のPDAは5でないという確証が得られる。

その上、他人の解除条件を知ればある程度は自分の解除条件を特定出来る。

「そういうことなら」と、中瀬は相川にPDAを差し出した。

PDAの画面に表示されていたのは絵札のトランプ。

それはハートのQだった。

相川はルールに書いてあったジョーカー、カード、といった単語が気にはなってはいたがどうやらこういつ事らしい。

言わば、PDAはトランプなのだ。

だからこそ、3人の参加者に番号のついたPDAを配布したのだろう。

（妙に洒落た真似をするもんだ…）

「私のPDAはQ。ゲーム開始から71時間後まで生き残ることが条件だよ」

他の参加者と争う必要の無く生き残るだけといつ単純な解除条件。

だからだろうか、中瀬の表情は明るかった。

相川が画面を確認し「ありがとう」と、中瀬に礼をした直後に文香がPDAを差し出してきた。

PDAに表示されていたのは中瀬の時と同様にトランプの柄と数字。

ダイヤの6だ。

「JOKERのPDAの偽造が五回以上行われることが解除条件よ

JOKERとは他のPDAに偽装可能な特殊なPDAだ。

当然、ルールにその詳細は記載されている。

文香は相川が画面を確かに見たのを確認するとPDAをポケットにしまった。

それと入れ代わるようにして葉月はPDAをポケットから出し、相川に画面を提示した。

「これだろう、君の見たがっているPDAは」

葉月のPDAの表示はスペードの5。

相川が見たかった解除条件だ。

三人の誰かが5のPDAを持つているのが理想的とはいえ、望みは薄かつた。

持つていらない確率の方が高いのだ。

しかし幸運にも葉月のPDAは5番で、相川のPDAは5でない確証が得られた。

5以外の解除条件ならゲーム後半にPDAを入手しても解除の余地はある。

「ありがとうございます、葉月さん。これで随分楽になります」

事態が好転した事が嬉しい相川とは対照的に文香の表情は冴えなかつた。

「それでも実際、幸貴くんのPDAは分からなこままなのよね」

「いや、でもPDAを手に入れるのは無理でも手掛けたりこなら手に入るかもしません」

「え、どうやって?」

相川は文香の質問に対し、気まずそうに咳払いをした。

「どうしたんだい、相川くん?」

「いやですね、PDAの解除条件に三人殺せ、とか24時間以上誰かと行動しろとか書いてるんだから当然、ゲームを仕向けた奴らはこちらが見えてるんですよね?」

「やつなるだらうね」

「という事は、音声もゲームの運営者は聞ける可能性がある。それを利用してこちらから運営側にコントラクトを取れないかなー、と」

「なるほど、なら遠慮する必要は無いんじゃないかい?」

「いや、やつなんですけど。断り無しにいきなり声を挙げて、この場にいない誰かに話しかけたりしたら変な目で見られるかなと思つて……」

つまり、先ほどの啖払いはそういうことらしい。

なるほどね、と文香が笑うのが聞こえる。

「でも、もつ気になる必要はないだろう?」

葉月の言つ通り、断りさえすれば問題は無い。

相川はそつですね、と返事をしてから軽く息を吸い込んだ。

そして、この場にいない誰かに訴えるように声を挙げた。

「おい、このゲームの運営者、聞こえてる筈だ! 状況も把握している筈だ! 僕に配られるべきPDAが無い! これはお前らのミスなんじゃないか! ? だとしたらとるべき対応つてものがあるんじやないか! ?」

相川の声だけが部屋に響く。

そして少しの静寂の後、この場にあるPDAから一斉にアラームが鳴り始めた。

四人は何事かと思い、PDAに注意を向ける。

PDAが表示していた 解除条件の画面は強制的に別のものへと変わった。

その画面に表示されていたのは一頭身のガボチャの怪人が踊るアニメーションだった。

アラームが鳴り終わると、変わりにガボチャ怪人のダンスに相応しい軽快なBGMが響き始めた。

程なくして、ガボチャは踊りを止め、喋り始めた。

『やあ、僕はジャックオーランタンのスミスだよ。ワロシクー。』

機械で加工された耳障りな声だった。

相川達は何も返さないでいたが、スミスは構わず話を続けた。

『何やら僕達にミスがある、なんて事で抗議があつたみたいだけど
?』

『うやうらこのカボチャはゲームを仕掛けた奴等の仕業で間違いなさ
そうだった。』

「ああ、本来ゲーム参加者全員に配られるべきものが無かつたんだ、
当然だろ?』

機械音声に対応したのは相川だった。

『うーん、確かに君はPDAを手に入れられなかつたみたいだね。
でも、僕たちは確かに君の部屋にPDAは配置しておいたよ』

「つまり、俺が寝ている間にPDAを奪つていつた奴がいると?』

『そこまでは言えないよ。僕たちが言えるのは「こちらにミスは無か
つたって事さ!』

誰かが奪つたに以外にあり得ない、そう思いながらも相川は口には
しなかつた。

「だがミスが無かつた、で済ませるのか?』

『だつて僕らはPDAを全員の部屋に配つたよ、確実だ。』

「俺が寝ている間にPDAを奪われたのはゲーム参加者の行動開始時間に誤差があるからだ。そしてその誤差を埋める対策をお前らは怠つた」

『そんなこと言わるとほ心外だね。まあ、キミが特別に不利な状況は可哀想だから多少のことはしてあげてもいいよ。僕らも鬼じゃないしね！』

「じゃあ、俺の解除条件を教えてくれ」

『流石にそこまではするのほんとかな。もつちよつと手頃なお願いじゃないとね』

「じゃあ、どのPDAにどのルールが載つているのか知りたい」

『それもちよつと手頃なお願いとは言えないよ』

渋るガボチャ。

「じゃあ、お前が俺のPDAに何のルールが載つていたかを教えるつてのはどうだ？」

『それでもキミのPDAが殆ど特定されちゃつからね』

異なる一つの番号のPDAに載つているルールが全く同じ、ということはない。

したがつて、載つているルールが分かつてしまつと、PDAのルーランを見ればそれが相川のものかどうか分かるのだ。

とは言え、どこまで渋る氣だこのガボチャは、というのが四人の総意ではあつた。

「それならこれだけでいい。俺が指定した二つのルールが俺のPDAに載つているか、KのPDAに俺が指定した一つのルールが載つているかの計二つを教えてくれ」

『それつて計二つになつてゐる氣もするけど……。しかし、うーん……そのくらいなら面白くなりそつだし……。いいよ、教えてあげるよー。』

「よし、じゃあまず俺のPDAについてだ。ルール8、ルール9が載つているか?」

『えーと……いや、どうも載つてないよ』

「じゃあ、KのPDAについてだ。ルール8は載つているか?」

『この質問、何か意味でもあるの?』

「意味があるかどうかはこちらで判断する」

『ふーん、まあいや。これも載つてないよ、残念だつたね』

「どうだうな

『じゃあ、これで慈悲深い僕の救済措置もおしまいー不利な状況で

『もめげずに頑張ってね～

スマスの言葉を合図にPDAの画面は本来の表示に戻った。

数瞬の静寂の後、全く腹立つガボチャだつたわね、と文香が切り出した。

「いや、でもある程度は進歩したんじゃないかな。相川君のPDAにはルール8とルール9は載つてない。これは結構な収穫だつたと、僕は思うけどな」

「そうですね」

「それでも、PDAのルール欄を見てこれが幸貴くんのじゃない、つていうのは分かつてもそれ以上は分からぬ訳で……」

「そんな事はないよ

相川は中瀬の言葉を簡単に否定する。

「どういう意味だい、相川君？」

相川は、ええ、と軽く笑顔浮かべた。

そして次の二言は葉月達にとつて予想だにしないものだった。

「実は、今のやつとりで俺のPDAを奪つた奴のPDAが分かるんですよ

第二話 「ルール」

スミスというカボチャ怪人とやり取りで得た情報は、相川に配られたPDAにはルール8、ルール9の両方ともが記載されておらず、KのPDAにはルール8は記載されていないというものだった。

ルール9は首輪の解除条件の一覧、ルール8はゲーム開始から六時間は全域を戦闘を禁止にするというものだ。

そして、この情報で相川のPDAを奪った人間のPDAを断定を出ると相川は言つ。

「本当なの、幸貴くん！？」

声を挙げたのは文香だけだが、葉月や中瀬も文香と同じ心境だった。

相川は軽く苦笑した。

「すいません、言い方がちょっと大袈裟でしたね。分かるのは俺のPDAを奪つた犯人に配られたPDAに載つてているルールです」

「いえ、そうだとしてもよ……」

文香達にはPDAに記載されているルールですら断定出来るのは思えなかつた。

「詳しく話す前に皆さんのおPDAのルール欄を見せてもらひますか？疑つようで悪いんですが……」

『疑うよつで』の意味がいまいちピンと来ない文香達だったが、ルール欄を見せるることは承諾した。

葉月のPDAに記載されていたルールの番号は、1、2、3、9。

文香のPDAには共通の1、2番以外に4番と5番。

中瀬のものは1番、2番、5番、8番だった。

相川はその全てを確認すると納得した様子で頷いた。

「疑うよつな真似してすいませんでした。問題無さそうです」

そつ言われても文香達には相川が何故そう判断したのかも分からなかつた。

「それじゃあ、どうして俺のPDAを奪つた奴のPDAに載つているルールが分かるのか話したいと思います」

葉月、文香が半信半疑といった様子で頷く。

対照的に中瀬は期待に満ちた表情で首を縦に振る。

相川はそんな彼らの様子を確認し、話を続けた。

「俺のPDAを奪つた奴…………そうですね、『犯人』とでもしますか。この『犯人』はPDAを取つて行つたくらいですからルールが真実だった場合を考えて動いてます。それで、まずハッキリさせたいのが『犯人』が複数犯か単独犯か、です」

「おそらく、単独犯でしょうね」

返したのは文香だった。

「『犯人』が複数でも、幸貴くんのPDAを入手出来る人間は一人だけ。だから、入手出来ない方の人間が犯行を許すとは思えない」

「しかし文香くん、『犯人』の連れが相川くんのPDAを手に入れた人間と今後も協力するつもりだつたかもしれないじゃないか。だとしたら犯行を許しても不思議じやない」

葉月が異議を唱える。

「でも、まともな神経の持ち主なら他人のPDAを奪う奴を信頼して一緒に行動しようとは思わないわ」

「それも一理あるが……」

「そもそも、他の誰かが見ている中でPDAを奪おうとする事や提案する事が考えにくいわ。そんな事をしても反対されるのは目に見える上に信用出来ない人間と判断される」

相川が文香の考察に同意するように頷く。

「そうですね。それに『犯人』にとつて人に見られる状態での犯行はデメリットが大きい。犯行を見ていた奴が『犯人』の犯行の情報を漏らすと、PDAを集めている参加者や俺に狙われる、仲間を組もうにも犯行を知った参加者には信用されない、なんて事になりかねません。だから『犯人』は誰かが見ている中ではPDAを奪いに

「くい」

「確かに、そう考えるとそうだね」

葉月が難しい顔をしながら頷く。

「それに思い出して下さい。葉月さんと文香さんは単独で行動して
いた六人の人達と会っていますよね？」

「そうだね、僕達は郷田さんと漆山さん、麗佳さんと手塚くん、そ
れに長沢くんとかりんちゃんの計六人が一人で行動していたのを見
ているよ」

「それに中瀬さんも一人で歩く男の姿を見ていることを考えると、
俺達の知らない所で複数で行動出来たのは一人だけです」

ルール3やルール4によれば、ゲームの参加者は13人。

文香達が見てきた人間は七人。

七人と相川達の四人を除くと残りは一人のみとなる。

しかも、七人は全員が単独で行動をしていた為、相川達の知らない
所で接触できた参加者はその二人に限られる。

「という事は、ただでさえ考えにくい複数犯という説は残る一人が
都合よく接触してゐる場合に限られるんですねよ」

「そうね。そう考えると『おそらく』というレベルではなく、ほぼ
間違いなく『犯人』は単独犯だわ」

「それと、『犯人』が単独犯という事は『犯人』は俺のPDAを奪う前には誰とも接触をしていないと思うんですよ」

「どうしてだい？」

「文香さん達が会つてきた七人が単独で行動するようになったのはルールの信憑性を認め、全てのルールを把握したからだと思うんです。ルールが信じ切れないなら一緒に行動するでしょうし、ルールを信じっていてもゲーム開始から6時間は戦闘禁止だから、ルールを全て把握する前にあわてて単独になるメリットは薄い」

「確かにそうだろうね。実際に、ルールを交換するまでは一緒に行動していた訳だしね」

「となると、俺がまだ目を覚ます前に単独で行動していた人間は全てのルールを把握して、他の参加者と別れたか、もしくは誰とも接触していなかつたかの二択になりますよね。そしてそれは単独で俺の部屋に来たであろう『犯人』にも当てはまる」

「つまり、『犯人』は幸貴くんのPDAを奪う前に全てのルールを知つてたか、あるいは誰とも会つていなかつたか、ということになる訳ね？」

「はい。そして、文香さん達は確実にルールを全て把握した参加者を六人見ていますよね？」

「ええ。私とおじ様を除けば六人になるわね」

「ですが、その六人がルールを知つた後で、俺の部屋に來ても時間

を考えると俺はもう目を覚ましてる。つまり、その六人が『犯人』だった場合はルールを全く知らない状態でしか俺の部屋には来られない。では、残りの三人の中に『犯人』がいると仮定します。中瀬さんが見た男は単独だった。残りの一人では全てのルールを把握するのは不可能。このことを考えると、この三人も誰かと接触する前にしか犯行は行えない。要はどの道、『犯人』は誰とも接触しない内に俺のPDAを奪つた、ということになる

中瀬の、おおーーという感嘆の声を聞きながら相川は話を続けた。

「それで、ここからが肝心なんですが……。そもそもPDAを奪つて部屋を後にするというのは少し不自然に思いませんか？」

文香も葉月も怪訝そうな顔をする。

「不自然って、どこかだい？」

文香と葉月にはその理由が分からなかつた。

無論、中瀬も理解していなかつたがその表情は相も変わらず期待に満ちていた。

「具体的に言うと、何故『犯人』は俺の首輪にPDAを差し込まなかつたのか、ということですよ。ルール3が本当なら『犯人』の首輪を差し込むことで俺を殺せる。でも『犯人』はそうしなかつた。PDAを奪つたという事はルールが真実だという前提で行動し、尚且つ俺を蹴落とすつもりだつた筈なのに」

ルール3の内容は以下の通り。

ルール3

PDAは全部で13台存在する。13台にはそれぞれ異なる解除条件が記載されており、ゲーム開始時に参加者に一台ずつ配られている。この時のPDAに書かれている条件がルール1で書いた首輪の解除条件である。各々に初期配布された以外のPDAを首輪を差し込むと首輪が作動する。

このルールが真実ならば他人のPDAを差し込まれた首輪は作動する筈なのだ。

そして首輪が作動すれば当然ながら相川が今生きている訳がない。しかも首輪のコネクタ部分は体の正面側、ちょうど顎より少し下あたりにある。

相川は仰向けに寝ていたので、『犯人』は簡単にPDAを首輪にコネクト出来た筈だ。

「いや相川くん、もしかしたらPDAを接続したのに首輪が作動しなかつたのかも知れないじゃないか」

相川は首を横に振る。

「首輪が作動しなかつたら、ルールが嘘だと分かり、俺を起こして協力しようとする筈です。ルールが嘘だとは分かるが、PDAだけは持ち去るというのには不自然過ぎます」

「なるほど……」

「考えられる理由は一つ、『犯人』のPDAにはルール8が記載されていたから…だと思います」

ルール8はゲーム開始から六時間は全域を戦闘禁止にするというものだ。

『犯人』は誰ともルールの交換をせずに相川の部屋に侵入していた筈だ。

そうなると、『犯人』は自分のPDAでルール8を知ったという推測が成り立つ。

「つまり、『犯人』はPDAを首輪にコネクトさせる事が戦闘行為になると判断したという事かい？」

「判断したというよりも、警戒したというのが正しいと思います。『犯人』もPDAを差し込むのが戦闘行為とみなされるとは確信しなかつたでしょうが、万が一という事を考えたんでしょうね」

「そうなると、この『犯人』は相当慎重な人間よね」

「そうです、そしてその慎重な人間がPDAを奪った。そもそも、PDAを盗むなんていうかなり反則くさい事ですよね。しかも寝ていた相手のPDAを、それも戦闘禁止も解けてない状況でやつているんですよ。ルールを全て把握しない内に」

「何か理由がありそうね」
文香は顎に手を当てる。

「理由は、PDAを奪うメリットを知っていて、奪つても大丈夫だ

「こうの確証とは言わないまでも、根拠があつたからだと思います」

うとうん、と嬉しそうに反応する中瀬。

文香はそんな中瀬を横田に見ながら口を開く。

「でも、その根拠はどこからくるのかしらね？」

「『犯人』のPDAにはルール9が載っていて、それを見たから、だと俺は思います」

「ルール9は確か、首輪の解除条件の一覧だったね」

葉月は自分のPDAの画面に目を落した。

「ええ、この中の2、6、8のPDAの条件を見ればPDAが自分の解除条件とは関係無くとも、PDAが交渉に使えると判断出来る。つまりPDAを奪うことのメリットを知れる。しかし、これらの解除条件は厳密には他人のPDAを奪わなくとも達成出来る。これを見てもPDAの取り合いがルール上、セーフかは分からない」

『2』の条件はJOKERの破壊、『6』はJOKERの偽造効果が五回以上、そして『8』は五台のPDAを破壊。

一見、他人の持つPDAを奪わなければならぬ条件に思えるが、厳密には奪わずとも達成可能である。

「それに、PDAの略奪が認められていたとしても戦闘禁止のように時間による制限があるかもしない。しかし、決め手のなるのが

『K』の解除条件」

『K』の解除条件は以下の通り。

PDAを五台以上収集する。手段は問わない。

「PDAの五台以上の収集、これでPDAの略奪が認められていることが判明する。しかも『手段は問わない』といったもんだ。これでおそらく『犯人』は不明瞭なルールに恐れずに犯行に及んだでしょう。実際は『手段は問わない』なんてのは詭弁だつた訳ですが、『犯人』はこれがある程度信用したんでしょう」

「成る程ね、さっきの『スマス』とのやり取りでKのPDAにルール8が載つていないことが分かっているから、Kを持つ人間が自分の解除条件とルール8を見て犯行するのは不可能。幸貴くんのPDAにルール8、9は載つてないから『犯人』が相川くんのPDAのルール欄を見たとしてもルール8、9は得られない」

KのPDAを持つ者はルール9を知らずともPDAを奪うことが認められないと判断出来る。

しかし、KのPDAにはルール8が載つていないのでKのPDAの持ち主は『犯人』ではないと考えることが出来る。

「はい、PDAのルール欄はPDAを手に取らず、つまり略奪せずにボタンやタッチだけで見れます。だから『犯人』がKの解除条件を知らずとも、俺のPDAのルール欄を見るかもとは思つたんですが」

「でも、相川くんのPDAにはルール8もルール9も載つていない。しかも『犯人』のPDAはルール8の載つていないKではない」

「そうですね。つまり、犯人のPDAのルール欄にはルール8とルール9が載つてることになる」

それが相川の推理の結論だつた。

一つのPDAに『えらべてあるルールはルール1、ルール2以外には』一つ。

よつて『犯人』のPDAのルール欄が完璧に判明したことになる。

おおー、と感心したような声を挙げる中瀬。

「だからさつき、僕たちは『犯人』でないと判断したのか。しかしこの事を考えた上で『スミス』にあんな質問を？」

「ええ、一応」

「しかし、運が良かつたわよね。幸貴くんのPDAにルール8、ルール9が載つていたらここまで推理出来なかつた」

「いえ、そんなに幸運という訳ではありませんよ。どちらも載つていない確率は50%近いです。それに片方載つっていて、片方載つていらない場合でも『犯人』のPDAと俺のPDAのルール欄のどちらもがある程度分かる訳です。そもそも理想はどちらも載つていた場合です。これなら俺のPDAが完璧に断定出来ますからね。まあ、こちらの可能性は5%もありませんが」

「つまり、『スミス』がどう答へても悪くはないって事か。いやはや、大したもんだ」

「ホントだよ、幸貴くんすゞいーー！」

相川の説明が始まつてからろくに口を開かなかつた中瀬が相川の手を握り、上下に降る。

もつとも、口をあまり開かなかつたと言つても、おおー、とか、なるほどー、などと呴いていて大人しかつた訳ではないのだが…。

「いや、でも不安要素もあるんだよ」

「不安？」

中瀬は相川の腕を上下させていた手を止めた。

「うん。」JOKERを持った人間が他のプレイヤーと接触無しでどこまでルールを把握出来るかつてことなんだけど…」

「なるほど、JOKERは自分の首輪解除の為のPDAに載つてないルールまで教えてくれるのかつてことね？」

「ルール2には五、六人が協力すればルールが揃うと書いてある。最初、これを読んだ時はJOKERを持つていても一人で知れるルールの数に違いは無いのだと思ったんです。でも厳密には五、六人でルールが集まるとは書いてるが一人で全部を知る事は出来ないとは書いてない」

「まさか……JOKERはルール欄まで偽造するのかしら？」

「そう……かもしれないという事ですよ。そうでなくともJOKER

Rにはきちんと四つのルールが載っているなら、『犯人』の首輪解除の為のPDAにルール8とルール9が載っている必要が無くなる。まあ、『犯人』が都合良くJOKERを持っていた場合ですが…

「そうね。でもJOKERのルールがJOKERを持つている人間のPDAに載っているものと同じになつていてるかもしれないわ。一人で知れるルールの数を統一するためには」

「俺もその可能性はあるとは思います。あと、JOKERが最初に俺に配られていたとしたら、なおその可能性は高いでしょう。スマスが俺のPDAにはルール8とルール9が載つていないと言ったのはJOKERも例外でない筈。なら、JOKERのルールとJOKERでない方に載つっていたルールが完全に一致している可能性が高い」

「でもどっちにしろ、文香さんの為にJOKERは必要なんだし、やる事はあんまり変わらなじゅない？」

議論に割り込む中瀬。

「まあ確かに、行動方針そのものはあんまり変わらないけどね」

「どの道、考えたってJOKERが手元に無い限り分からないし、そろそろ移動を始めた方がいいかしらね」

「やうだね、そうしよう。移動しながらでも考えるのは出来るぞ」

葉月の言葉を合図に四人は部屋を出た。

第四話 「関係」

部屋を出て真っ先に口を開いたのは文香だった。

「さて、まだ正式に決めては無かつたけど、この四人で協力していくって事でオッケーよね？」

文香と葉月は以前から協力関係だった。

問題は中瀬と相川がこの二人と組むかということだが……。

中瀬と相川はほとんど同時に「はい」と首を縦に降った。

中瀬は以前からの知り合いである相川を信用していたし、葉月と文香もこれまでの事から信用できる人物と考えていた。

協力は自分から申し出たいくらいだった。

相川も同様に、中瀬のことは良く知っているし、信用して良いと考えていた。

葉月と文香の方は完全に信用とはいかないが、二人首輪の解除条件は争いが必要でないし、利害を考えずに解除条件を明かしてもくれた。

二人がJOKERを隠し持つているという場合を除けば、ほぼ信用仕切つてしまつて問題ないと判断した。

裏を返せば、JOKERが見つかるまで完全には信用出来ないと考

えていふ」とにもなるが。

「それじゃあ改めてよろしくね、美那ちゃん、幸貴くん」

「相川さんよろしくお願ひします、文香さん、葉円さん」

「ああ、四人で協力して無事に首輪を外そう」

「そうですね、四人揃つて家に帰りましょー」

四人が思い思いの決意を口にする。

「さて、まずはおじ様の首輪解除の為に一階にあるチェックポイントを周りましょー」

「悪いね、僕の解除条件に付き合わせてしまって」

「何言ひてるんですか。そんなのお互い様じゃないですか」

笑顔で返す中瀬に続いて相川も口を開いた。

「そうですね葉円さん、気にしないで下せー。いつか俺の解除条件に付き合わせることになるでしょうし」

相川の首輪の解除条件は判明していない。

だが、必ず自分のPDAを見つけて出し首輪を解除する、相川の言葉はそういう意志の表れだった。

「すまないな、皆

葉月の表情が僅かに緩む。

「それでおじ様、チェックポイントがどうこう風に配置されてるか二人に説明してあげた方がいいじゃないかしら？」

「人に、ということは文香は既に葉月から説明を受けているのだろう。

そうだね、と文香に返してから葉月は説明を始めた。

「チェックポイントは全てで24箇所。ワンフロアに4個ずつ配置されている」

葉月は自分のPDAを軽く操作してからその画面を相川達に示した。

「これは一階の地図だが、見れば分かる通りチェックポイント間の距離は結構なものだ。他のフロアも似たようなものでワンフロア分通過するだけでも中々大変だろう」

葉月の差し出したPDAの画面は以前にも相川達に見せたこの建物の地図が表示されていた。

しかし、地図には以前には無かった点が表示されおり、これは中瀬のPDAにも文香のPDAにも表示されていない物だ。

解除条件に必要なチェックポイントを表示する5の特殊機能だ。

点には赤いものが三つ、青いものが一つあった。

「えっと、この赤いのと青いのがチェックポイントでいいんですか？」

「ああ、赤い点はまだ通過していないチェックポイントで青は既に通過しているチェックポイントを示しているらしい」

「じゃあ、一つは既に通過しているんですか」

「ああ、たまたま僕の初期地点から近いものがあつてね」

「それじゃ、とつあえず一階の残り三つを手っ取り早く通過してしまいましょ」

文香の言葉を合図に四人は移動を開始した。

移動中は葉月が先頭を歩いた。

葉月しかチェックポイントへの最短経路が分からぬ為だ。

葉月のすぐ後ろには相川、さらに後ろに文香と中瀬が並んで移動していた。

「そう言えば美那ちゃん、もしかして幸貴くんとここに来る前から

知り合いだつたりするのかしら?」

「えつ、どうしてですか?」

「いや、何となくそんな気がしたのよ。違つた?」

「いえ、幸貴くんとは中学で一緒にでした。よく分かりましたね」

「やっぱり私の田に狂いは無かつたわね」

えらく満足気な文香。

二人の前を歩く相川に「この会話は聞こえていたが、会話に参加しようとはしなかった。」

前の方を歩く葉月と相川は隣には特に気を払わなければならぬからだらうか。

「中学が同じだつたつてことはクラスが同じだつたりしたのかしら?」

「いえ、クラスは一緒になつたことは無いです。でも、部活が一緒ですから結構仲良かつたんですねー」

「つまり男女の仲だつた、そういう訳ね?」

言葉と同時、中瀬とその前を歩く相川の足が止まつた。

それに合わせる為に文香と葉月も足を止めた。

「そ、そんな訳無いじゃないですか！」

中瀬は両方の手のひらを激しく横に振り、否定する。

文香はそんな中瀬の反応を楽しんでいるようだ。

「そんなムキになるとかえって怪しいわね。ねえ幸貴くん？」

「知りませんよ」

相川は少し気まずそうに答え、止まっていた足を動かし始めた。

それに続いて三人も歩き始めた。

「あら、いよいよ怪しくなってきたわよ？」

文香は意味深に笑いながら中瀬の方を見る。

「ほ、本当にそんなんじゃ無いですから」

「分かってるわよ、『冗談よ冗談』

中瀬も相川も、本当に「冗談のつもりなのだろうか、とは思ったが口にはしなかった。

「でも男女で部活が一緒ってことは一人とも文化部だったの？」

「いえ、陸上部でしたよ」

「なるほどー、陸上部か。確かに陸上とか水泳ってあんまり男女で

部を分けたりしないわよね

中瀬が文香の言葉に応えようとしたその時だった。

その場にあるPDAから一斉にアラームが鳴り出した。
アラームは数秒の間鳴り続け、アラームが止まると変わりに機械で
合成された声が告げた。

『お待たせしました、ゲーム開始から六時間が経過したので全域の
戦闘禁止を解除します』

ついに全域の戦闘禁止が解除された。

これから先は、誰がいつ襲つてきてもおかしくない状況だ。

しかし状況が大きく変化したと言つても、あらかじめ分かっていた
ことだ。

四人は歩く足を止めたりはしなかつた。

「戦闘禁止も解除されたし私達がいくら四人グループの大所帯とは
いえ、そろそろ武器が欲しいわね」

「武器…ですか？」

武器が欲しいという文香の言葉は中瀬にとつては予想外のものだつ
たらしい。

食料と水を探す方針にはなつていた。

それは四人が移動を始めて直ぐに話し合いで決まったことだった。

三田の間、IJの館から出られないのだ。

当然、食料や水が用意されている。

そう考えるが自然であり、相川達もまた、そう考えたのだった。

しかし、武器を探すなんて話は一度もしていない。

「ええ、首輪の解除条件に殺害が含まれている以上ビックにある筈よ」

もし武器が館内に無いとしたら、首輪の解除に素手で人を殺す必要のある参加者がいることになる。

それはあまりにゲームとして不親切だ。

「そうですね、俺も武器が全く無いとは考えにくいと思います」

「確かに武器は用意されているだらうが…やはり使わなければならないんだろうか、こんな状況では」

出来れば使いたくない、そう言いたげな表情の葉月を見て相川は口を開いた。

「仕方ないことですよ、

武器を持たなければ敵に対抗するのも交渉するのも難しい」

相川の首輪の解除条件は不明だが、少なくとも他の三人の解除条件

は殺人も人を襲うことも必要無い。

しかし襲つてくる敵に対しての対抗手段を持たなければ、ただ一方的にやられるだけなのだ。

「相川くんの言つ通り、か……。使わずに済むと良いが、もしもの時の為に覚悟だけはしなくてはな」

葉月は覚悟を決めることにした。

「それじゃあ、食料と水はもちろらんのこと、これからは武器も積極的に探すという方針で大丈夫ね？」

三人とも文香に同意する。

移動を続ける」と、一時間弱で一つ田のチェックポイントを通過した。

その間、相川達は武器や食料を見つけるために、移動中に見かけた部屋は積極的に調べてはいた。

しかし食料や水、実用性のありそうな武器は一つとして見つけられず、見つけられたものは何に使用するものかも分からぬような物ばかりだった。

極端な例を挙げると、中瀬が大はしゃぎで見つけた「ハリセン」がある。

その時にあまりにはしゃぎ過ぎていたのか相川に「ハリセン」を引つたくられ、その「ハリセン」で頭に軽く一撃お見舞いされたりもしていたが……。

2つ目のチェックポイントを通過した直後、四人は新たな部屋を見つけた。

これまでの方針通り、入つて調べることにした。

中は今までの部屋と同じように埃っぽく、大小様々な段ボールや木の箱が積まれていた。

「何か役立つ物が見つかればいいんだが……」

葉月はあまり期待出来そうに無い、といった様子だった。

これまでの搜索があまり良い成果を挙げられていない為、期待感が薄れているのは当然とも言える。

「見つかりますって、きっと…」

「そうだね。俺もいい加減喉が渴いたし飲み物でも見つかればいいんだけど」

「そうね。あることを祈つて探ししましょう」

四人は搜索を開始した。

相川達は今まで通り各自で木の箱や段ボールを一つ一つ開けるという搜索方法とった。

段ボールや木箱を開ける音しか響かなくなり始めていた部屋に中瀬の声が挙がったのは搜索を開始してから数分後のことだった。

「幸貴くん見て、良い物あつたよ！」

『ハリセン』の時のように変な物を見つけて喜んでいるんじゃないだろうな、と思いつつも相川は声のする方へ振り返った。

みると中瀬が手招きしているので、やや急ぎ気味で近づいた。

「見て見て、これだよ」

中瀬が自分の足元にある、ラングセル2個分ほどの大きさの段ボールを指差す。

段ボールは開封されていて、中身は水の入ったペットボトル、インスタント食品や缶詰めでいっぱいだった。

「相川くん、中瀬さん、良い物は見つかったのかい？」

やや遠くから葉月の声が飛んでくる。

「はい、食料と水が見つかりました。」

相川は明るい口調で答えた。

続いて文香の方からも声が挙がった。

「食料だけじゃなく、武器も見つかったわ」

文香の手には長さ一㍍弱ほどの鉄パイプと木の棒が握られていた。

その後、部屋からはそれ以上は田ぼしいものは見つからず、部屋から出る前に見つかったものをどうするかを話し合った。

話し合いの結果、食料と水は四人に均等に分けて持ち運ぶことにし、鉄パイプは相川が、木の棒は葉月が持つことになった。

「今までが運が悪かったのか、今回がたまたま運が良かつたのか、まさか食料と武器がまとめて見つかるなんて」

「食料の方は一升分くらいはありますね」

言つと、相川は戦利品であるペットボトルの水を飲み始めた。

「鉄パイプと木の棒が見つかったけど、これって強い方なのかな?」

相川は中瀬の言葉を聞くと、ペットボトルから口を放して苦笑した。

「大丈夫、ハリセンよりは大分強いから」

中瀬はバツの悪わづな顔をしたが、文香と葉月は声を出して笑った。

部屋を出た四人はその後、特に問題なく一階の残り一つのチェックポイントを通過した。

これで一階の全てのチェックポイントを通過したことになる。

四つ目のチェックポイントを指す途中、地図上で一階へ続く階段とされる地点に寄った。

しかし階段はコンクリートやアスファルトの塊によって封鎖されていて、とてもではないが通れそうもなかつた。

地図を見れば、四人の見た階段の地点には×印がされていた。

他にも一階へ続く階段とされる場所は三地点あるがその内の一つは×印が記されており事実上、使用出来るのは×印のされてない一つだけだと相川達は結論した。

そして一階全てのチェックポイントを通過した以上、一階に居座る必要のなくなった一行は×印の無い階段へと向かっていた。

「しかし使用出来る階段が一つだけとは、参ったね」

葉月は軽くため息をつく。

「そうですね。それに、一つしか使えないとなると待ち伏せも怖いですね」

「確かに、好戦的な参加者が待ち伏せをしていてもおかしくはないわね」

ルール上、一階から順に侵入禁止エリアとなるので、当然ゲーム参加者は上の階を目指さなければならない。

つまり階段は多くの参加者が通らねばならず、待ち伏せにはつづりつけなのだ。

上の階に行くには階段を使う以外にも建物に一つだけ設置されているエレベーターを使うという選択肢がある。

エレベーターの設置場所は階段と同様にPDAの地図に示されているため、簡単にたどり着けるが相川達はエレベーターを使用せず階段のみで上の階を目指すと決めている。

何故ならエレベーターは極めて密閉された空間であるため階段と比べてリスクが高い。

しかも葉月の首輪の解除には全フロアを隈無く移動する必要があるため、一気に最上階まで移動可能というエレベーター特有のメリットが意味を為さないのだ。

目の前の角を曲がれば一階へ続く唯一の階段へ一本道、歩いて30秒あるかないかの位置で移動を一時中断した。

もし一階の階段で敵が待ち伏せているなら、田の前の角を曲がれば敵に見つかってもおかしくはないのだ。

四人は慎重に行動する必要があった。

だから角を曲がってしまった前にどうやって階段へ向かつか話し合つた。

とは言え、やれることは今までとあまり変わらず、武器を持った葉月と相川が先頭に立つて進むしか無いのだ。

結局、いつもより慎重に、注意深く移動するだけで、他はいつもと変えずに階段を田指した。

結果から言つと、敵の待ち伏せは無かつた。

階段へ向かう通路の途中も、階段を昇る際も四人以外の人の姿は無かつた。

階段を上がりきつた後も周りを警戒していくが人が襲つてくる気配は無かつた。

「どうやら、待ち伏せは無いみたいだね

葉月は、安堵の息を漏らした。

「そうみたいです。それで、これからどうしましょうか

相川も安堵が隠し切れないようで、随分と氣の抜けた声だった。

「どうあるって一階の探索じゃないの？」

一階への昇りあがると田と鼻の先に二階へ続くとされる階段があるが、こちらは封鎖されている。

PDAの地図にはおそらく×の印がされている」とだりつ。

三階へ向かうにしても、葉月の解除条件のチェックポイントを田指すにも一階をそれなりに歩く必要があるのだ。

「うん、それも選択肢の一つなんだけど」

「私達がここで待ち伏せしないかってことよね、幸貴くん？」

「ナニコレ」とだりつ

「待ち伏せ? どうしてだい?」

「いや、戦おうってんじゃないんですよ。ただ俺達は『犯人』や『OKERを持つ人間と接触しなきゃならない。その為に待ち伏せるのもアリかなと思つただけですよ」

『犯人』とは相川のPDAを奪つた人間の便宜上の呼び名である。

この人間との接触は相川の首輪解除には必須で、同様に『OKER』のPDAの持ち主に合わなければ文香の首輪解除は難しい。

「なるほど、そういうことだつたら僕は反対しないよ」

葉月が納得したように頷く。

「私も待ち伏せは有効だと思うわ。私達は今まで大した武器を手に入れて無いけどそれは他の参加者も同じ筈。強力な武器があるのは上の階からなのか、ゲーム後半からなのかは分からぬけど、少なくとも今は待ち伏せのチャンスだと思つ」

「私も、待ち伏せしても良いと思つ」

文香も中瀬も賛成した。

「じゃあ、ここでしばりく待ち伏せするとしますか」

相川達は一階へ続く階段で待ち伏せすることにした。

第五話 「階段」（前書き）

ルール一覧があります。

原作のルールが大体頭に入っている人は読み飛ばしても差し支えありません。

ルール4には変更点がありますが、作中でその内説明があります。

第五話 「階段」

一階へと続く唯一の階段の段数は全部で三十段ほどあり、段は一段目から一階の床まで真っ直ぐに規則正しく続いている。

階段の手前は通路ではなく正方形に近いスペースがあり、このスペースを通らねば一階から階段へはたどり着けない。

PDAの地図にも記載されているが、この館内には通路やドアで仕切られた部屋以外にもこういったホールがある。

ただこの階段手前のスペースは他のホールと比べると明らかに小さく、ちょうど平均的な学校の教室くらいの広さである。

このスペースは階段以外に三つの通路と繋がっているため、スペースへ向かう参加者は基本的に三つの通路から一つを選択することになる。

もちろん、一階から階段を降りればこのスペースにたどり着けるので厳密には四つの通路と繋がっているとも言える。

スペースは階段の昇り切ったところから見下ろせば、ある程度は見えるところとなる。

逆に言えば位置によってはスペースからも階段を昇り切った地点が見えるところとなる。

つまり、一階で階段のすぐ側に陣取つて待ち伏せすると階段を昇ろうとする参加者に気付かれるリスクがあるので。

しかし、階段の側でなければ待ち伏せしても相手に逃げられ易い。

加えて、階段前まで来た人間が一階にいる人間を見るには相当階段に接近した後でない限り、かなり姿勢を低くして見上げなければ難しいので見つかる可能性は低い。

そう判断した相川達は二階の階段の入り口の側で一階のスペースを覗きながら他の参加者を待つことにした。

待ち伏せは四人全員で行うのではなく二人組に別れて交代ですることにした。

壁の陰に隠れながら一階から一階を覗き見張る、なんてことは一人で事足りる。

見張りをしない二人は休んで体力を温存、回復させようという算段だ。

最初に見張るのは葉月と文香の一人で、相川と中瀬は見張りをしている一人から少し距離のあるところで休息を取っていた。

休息といっても、いつ誰が来るか分からないので寝て良いという訳でも無く、やることも無いので相川と中瀬はもう一度ルールに一通り目を通すことにした。

ルール1

参加者には特別製の首輪が付けられている。それぞれのPDAに書かれた状態で首輪のコネクタにPDAを読み込ませれば外す事ができる。条件を満たさない状況でPDAをよみこませると首輪が作動

し、15秒間の警告を発した後、建物警備システムと連携して着用者を殺す。一度作動した首輪を止める方法は存在しない。

ルール2

参加者には1～9のルールが4つずつ教えられる。与えられるルールはルール1と2と、残りの3～9から2ずつ。およそ五、六人でルールを持ち寄れば全てのルールが判明する。

ルール3

PDAは全部で13台存在する。13台にはそれぞれ異なる解除条件が記載されており、ゲーム開始時に参加者に一台ずつ配られています。この時のPDAに書かれている条件がルール1で言う条件にあたる。各自に初期配布された以外のPDAを首輪を差し込むと首輪が作動する。

ルール4

最初に配られる13台のPDAに加えてジョーカーのPDAが一台存在する。これは通常のPDAとは別に、参加者にランダムに配られる。ジョーカーはトランプのカードを他の13種のPDAとそつくりに偽装できる機能を持つ。制限時間などは無く、何度も他のPDAに偽装可能だが、一度使うと一時間は偽装機能は使えない。偽装機能が使用中の場合、一度偽装を解除しないと偽装機能は使用出来ない。偽装機能を使用する際には8桁の数字のパスワードを設定する必要がある。このパスワードは偽装を解除する際に再び入力する必要がある。偽装を解除する際のパスワードはPDAの「password入力」の欄を選択することで入力出来るが、JOKERだけでなく全てのPDAにこの欄は用意されている。JOKER以外のPDAにパスワードを入力してもパスワードは設定されていないためPDAに変化は無い。一度偽装を解除すると次に偽装を行う際には新たなパスワードを指定する必要がある。さらにこのPDAで口

ネクトの判定をすり抜けることは出来ず、首輪の解除条件のPDAの収集や破壊にはカウントされない。

ルール5

侵入禁止エリアが存在する。初期では屋外のみ。侵入禁止エリアに侵入すると首輪が警告を発し、その警告を無視すると首輪が作動し警備システムに殺される。また、2日目になると侵入禁止が1階から上のフロアに広がり始め、最終的には館の全域が侵入禁止エリアとなる。

ルール6

開始から3日と一時間が過ぎた時点で生存している参加者全員を勝利者とし、賞金20億円を山分けする。

ルール7

指定した戦闘禁止エリア内で誰かを攻撃した場合、首輪が作動する。

ルール8

開始から6時間以内は全域を戦闘禁止とする。違反した場合は首輪が作動する。正当防衛は除外する。

ルール9

カードの種類と首輪の解除条件は以下の13通り。

A : QのPDAの所有者を殺害する。手段は問わない。

2 : JOKERのPDAの破壊。手段は問わない。このPDAの半径1m以内ではJOKERの偽装は無効、初期化される。

3 : 三名の殺害。ただし、首輪の作動は含まない。

4. 自分以外の首輪を3つ以上取得する。

5. 館全域の24箇所のチェックポイントを全て通過する。特殊効果として地図上にポイントの表示がされる。

6. JOKERの偽装機能を五回以上使用。自分で行う必要も近くで行われる必要もない。

7. 開始から6時間以降に全員と接触。死亡している場合は免除。

8. 自分の半径5m以内でPDAを正確に五台破壊。六台以上破壊すると首輪が作動する。

9. 自分以外の参加者全員の死亡。

10. 首輪が五個以上作動すること。ただし開始から71時間以内とする。

J. 自分と24時間以上行動を共にした者が開始から71時間の時点での生存していること。

Q. 2日と23時間の生存。

K. PDAを五台以上収集する。手段は問わない。

一通り目を通すと中瀬は、「あー、疲れた」と、ため息混じりに口を開いた。

「確かに、かなりの量がある」

相川も中瀬に同調する。

「特にルール4はJOKERのパスワード、偽装機能、偽装解除、もつて回りそつ…」

額に手をやる中瀬。

「ルール見てて何か気付いたことある?」

相川の問いに対しても瀬はうーん、と唸る。

「気付いたことは無いんだけど、もし2のPDAを持った人が仲間になつてくれたら心強いねつて思った。JOKERの偽装を解除出来るんでしょ、2のPDAは」

「味方にする分にはそうだけど、2のPDAの特殊効果も良い事ばかりじやないと俺は思つ」

「どうして?」

「まあ、色々な場合が考えられるつてこと」

中瀬はふーん、と相槌を打ち、それ以上は追及しなかつた。

二十分後。

見張りは相川と中瀬が引き継いだ。

葉月と文香が見張りをしている間は特に変わったことは無かった。

相川達が見張りを始めてもしばらくは何もなかつた。

変化があつたのは相川と中瀬が見張りを始めて二十分近くが経過しようとしていた時だつた。

「今、何か音がしなかつた?」

中瀬が唐突に、しかし声を抑えて相川に尋ねる。

「さう?俺には聞こえなかつたけど…」

相川も小声で対応した。

見張りをしている以上、大声は出せない。

「確かにしたと思うんだけど…」

「どこのから?」

「多分、一階の階段手前のスペースから」

「どんな音だつた?」

「人の足音みたいに聞こえた」

すぐ近くに人がいるかもしないという事だ。

相川は警戒を強めた。

四人の方針として、人が来たら問答無用で制圧、とは行かない。

話し合いが出来るようなら話し合つ。

戦闘を仕掛けられた際には、逃げられるようなら逃げる。

戦闘するのはその際に逃げられないと判断した場合のみだ。

四人で話し合つてそう決めてある。

と言つても、戦闘になる確率が低いという訳でもない。

相川が警戒を強めてから一分以上が経過した。

その間は相川も中瀬も一階の階段前のスペースを注視していたが、警戒していた他の参加者の姿は確認出来なかつた。

「氣のせいだつたのかな」

自信の無い様子で呟く中瀬。

普通に考えれば階段前のスペースに誰かが来たのだとしたらその人間は階段を昇る筈だ。

ところが誰も昇つてくる様子は無い。

先に相手がこちらに気付いたとも考えにくい。

声は互いが何とか聞き取れるくらいに抑えていたし、一階から一階を見上げるには不自然なほど低い姿勢が要求されるのだ。

つまり、中瀬の聞いた足音のよつなものは気のせいだと判断するが一番自然な筈だ。

「一応、見に行つてみるよ」

相川は壁に掛けあつた鉄パイプを右手に取る。

「私も行くよ」

中瀬は階段を降り始めた相川の後ろについた。

相川と中瀬は警戒したまま階段を降り続けた。

十中八九、人はいないと判断していたが、万が一といつものがある。

階段を降り、一階のスペースを着くと、近くに人が隠れていなか確認することにした。

中瀬の聞いた足音が本物ならこの辺りに人が隠れている可能性が高い。

階段を降りる途中でスペースの全体が見えたので、スペースには誰も潜んでいないことは分かり切っていた。

問題はスペースと繋がる二つの通路。

その内の一つの入り口は階段を降りた相川達の真っ正面にあり、通路自体がしばらく一本道なのでかなり先まで見通せる。

軽く見ただけで誰も居ないことが分かった。

となると、残りは相川達の左と右に一つずつある通路。

二人はとりあえず、右に入り口のある通路から調べようと左の通路入り口に背を向け、右の入り口に向かって足を進めた。

二人が二、三歩進んだところで背後から微かだが確かに音がした。

二人は急いで先ほど背を向けた通路の方を振り返った。

見ると、10歳くらいの少女が通路とスペースの境目あたりに立っていた。

明らかに無害に思える田の前の存在に対しても相川も中瀬も警戒を解いた。

中瀬が聞いたという足音は彼女のものだったのだろう。

ここまで来て階段を上がらなかつたのは、待ち伏せしている相川達に気付いたからだろう。

彼女の身長なら低い姿勢からでなくとも一階まで見上げられる。

相川は構えていた鉄パイプを下ろし、出来るだけ警戒されないよう

に、やんわりと声を掛けた。

「ゲームの参加者だよね？出来れば話しぃ…

言葉は隣にいる中瀬の叫びに遮られた。

「幸貴くん！」

直後、相川の左の肩甲骨の辺りに強い衝撃が走った。

背後から何かが打ちつけられたのだ。

視界が揺らいだ。

痛みは動搖の後にやつてきた。

相川はややバランスを崩しつつも、何とか背後を振り返る。

相川が状況を把握する間もなく、何かが相川の顔面に向かつて飛んで来た。

咄嗟に右手の鉄パイプで受け止める。

金属バットがボールを叩いたような高い音が響いた。

バランスを崩し気味で、しかも片腕だった為か、相川は衝撃に押し負け、ヨロヨロと後退させられた。

後ろに下がると鉄パイプを持った中学生くらいの少女の姿が見えた。

持っている鉄パイプは相川と同じ物だろ？。

少女が両手で持った鉄パイプを振り上げ、迫つて来る。

相川は両手で鉄パイプを構え直す。

少女がパイプを思い切り振り下ろす。

相川はそれを鉄パイプでしつかりと受け止め、再び高い音が響く。

当然、条件がイーブンなら男の相川が少女に力負けしたりはしない。

今度は相川が少女を押し返した。

少女は先ほどの相川の様に後退しながら声を張り上げた。

「優希！今の内に」

それは相川が先ほど話し合いをしようとした、今は相川が背を向けている幼い少女に向けられたものだつた。

声を受けた少女は、うん！としつかりと返事をして階段へ向けて駆け出し、階段を上り始めた。

中瀬は迷つていた。

相川と少女の攻防にはあまりにも急な事で混乱し、行動出来なかつた。

今も、目の前で相川を襲いかかった少女に対処すべきか、階段を駆

け上がる幼い子を追うべきか判断出来ないでいた。

相川はそれなりの運動神経を持つた男子高校生だ。

目の前の少女に負けるとは考えにくい。

とは言え、相川と襲撃してきた少女を放つてまで階段を駆け上がる少女の方を追う必要があるだろうか？

そんな中瀬の迷いに感づいたのか相川は中瀬に向かって指示を出した。

「とりあえず、ここにいて様子見を！」

おそらく、襲いかかつて来た少女と優希と呼ばれた少女は協力関係にある。

鉄パイプを持つた少女が襲いかかつて来たのは優希と呼ばれた少女が二階へ上がる為の囮の可能性が高い。

つまり、少女が襲いかかつて来たのは相川達に階段を昇る少女を追わせない為と考えられる。

このことを踏まえると余計な事はせず様子見がベストな選択肢だと相川は判断した。

現に、相川の目の前にいる少女は声を張り上げて以来、襲いかつて来る気配が無い。

このまま、優希と呼ばれた少女が階段を上り切つてしまえば目の前

の少女も相川達を無視して一階を指すだろ。

優希がちょうど階段の半分くらいまで上がった時に、一階から文香の声が挙がった。

「幸貴くん、美那ちゃん！何かあったの！？」

声から、階段へ向かつて走つて来ていると判断出来た。

おそらく葉月も一緒だろう。

文香の声を聞くと鉄パイプを持った少女の顔色が変わった。

おそらく、待ち伏せは相川と中瀬の一人だけだと踏んでいたのだろう。

想定外の人間。

しかもおそらく階段に向かつて来ている。

優希を無事に一階にたどり着かせようとしていた少女にとつて最悪の状況だった。

何とかしなければならない。

相川を無視してとにかく階段へ向かおつかと考えた。

だが、最悪の状況を打破したは少女ではなく相川の挙げた声だった。

「階段から出来るだけ離れて下さい！」

二階にいる文香への指示だった。

正確には文香と一緒にいるであろう葉月への指示もある。

ここで、文香達が下手に動けば戦闘になりかねない。

相川はそれだけは避けたかった。

そして相川の指示に文香と葉月は従つたのだろう。

優希は無事に階段を上り切り、鉄パイプを持つ少女へそのことを伝える声が二階から飛んできた。

声を受けた少女は相川に向かつて鉄パイプを投げつけた。

相川がそれを捌く僅かな隙に少女は相川の横を駆け抜け、階段へ向かつた。

そして、優希と呼ばれた少女とは比べ物にならないくらい身軽かっ素早く階段を駆け上がり、あつという間に姿が見えなくなつた。

階段前のスペースには相川と中瀬だけが残された。

第六話 「一階」

葉月と文香は相川達が見張っている間、通路の床に座り休息をとっていた。

相川達が見張っている位置とは少し距離がある。

例によつて、特にする事が無かつたのでルールの確認や荷物の整理をしながら過ごしていた。

相川達が見張りを始めて二十分くらいが経つてからだつた。

一階の方から何やら物音がした。

二人は少し不審に思い、階段の方を見た。

そこには一階を覗いてる相川と中瀬の姿がある筈だつた。

しかしそこには一人の姿は無く、一階の方から再び聞こえてきたのは金属が打ち付けられるような音と人の声だつた。

何かが起きている。

そう感じた二人は、急いで立ち上がり、階段へ向かつて走り出した。

それと同時、文香が声を擧げる。

「美那ちゃん、幸貴くん！ 何かあつたの！？」

直ぐに一階の方から返事が返ってきた。

「階段から出来るだけ離れて下さい。」

相川の声だった。

その指示の意図するところは分からなかつたが、二人はとりあえず階段へ向かっていた足を止めた。

すると階段から一人の少女が駆け出してきた。

少女は文香達とは別の方へ繋がる通路を走り抜けていった。

状況が掴み切れず、一人は互いに顔を見合せていると今度は先程とは別の少女が階段を駆け上がりて来た。

そしてその少女の顔には一人とも見覚えがあつた。

相川や中瀬と接触する前に遭遇し、情報を交換した後に別れた少女だ。

その少女は先ほど姿を消した少女と同じ方へ走つて行き、姿が見えなくなつた。

程なくして、一階から相川の声が飛んできた。

「もう階段に近付いても大丈夫です！」

声を受けて、葉月と文香は駆け出し、そのままの勢いで階段を下つて行つた。

相川を襲つた少女が姿を消すと、直ぐに中瀬が相川に駆けよつて來た。

「幸貴くん大丈夫！？」

鉄パイプで殴られた左肩の心配をしているのだろう。

「大丈夫、大したことないって」

相川は左肩を軽く一回ほど回して見せる。

肩の動きや表情に不自然さは見当たらない。

どうやら本当に大丈夫なようだ。

良かつた、という中瀬の言葉。

それを搔き消してしまつかのように相川は二階に向けて声を挙げた。

「もう階段に近付いても大丈夫です！」

すると直ぐに葉月と文香が階段を駆け降りて来た。

階段を降りると、そのまま相川達に駆けよって来た。

「二人とも無事かい！？」

葉月は少し息を切らしながら、心配そうに尋ねた。

「大丈夫ですよ。一発だけ肩を叩かれましたけど大したことないで
す」

相川は中瀬の時にしたように、左肩を軽く回す。

「私も大丈夫です」

中瀬も答える。

「それで、一体何があつたの？」

文香の言葉を受けて、相川は表情を引き締め、事の経緯を説明し始めた。

説明は出来るだけ詳細に、相川の指示の意図なども触れながら進め
た。

詳細にとは言つても、相川が襲われた瞬間は相川自身も無我夢中だ
つたので細かく説明するのには限界があり、中瀬に何度か補足して
もらつた。

事の経緯を話しあると、文香達の疑問も解けたようで、納得した様子を見せた。

「いやしかし、無事……とまではいかなくとも、大したことなくて良かった」

葉月にとつてはそれが何より大事らしかつた。

明るくまとめようとする葉月に対し、文香は神妙な面持ちで呟いた。

「しかし、かりんちゃんの方から戦闘を仕掛けてくるとはね……」

「かりん？」

「ええ、幸貴くんや美那ちゃんにも一度話したでしょう？あなた達と会う前に私とおじ様が会つた子よ。ルール教えた後、直ぐに別れただけど」

「そう言えばそんな」と言つてましたね

「ええ。それにしても、いきなり襲つてくるなんて……」

予想外だ、と付け足しそうだつた。

かりんは葉月と文香が信用出来ないと言つて、二人との協力を拒んだが、文香には人を積極的に攻撃するような人間には見えなかつた。だから文香は少なからず戸惑つていた。

そんな文香をよそに、相川はスペースの端まで歩き、落ちていた鉄

パイプ左手で拾い上げる。

少女が彼に向かつて投げつけた物だ。

相川は以前から使っていた右手の鉄パイプと左手の拾つた鉄パイプを見比べながら、

「まあ、仕方ないでしょ。俺と中瀬さんが待ち伏せて他の参加者を襲撃しようとしている様に『優希』って子には見えた。その報告を受けた『かりん』って子は、仕方なく強行突破に乗り出したんでしょ」

言つと、相川は以前から使っていた方の鉄パイプをその場に落とした。

少女との戦闘で脆い部分を叩かれた所為で、変形し、今にも折れてしまいそうな状態だつたのだ。

早い話が使い物にならない。

だから捨てたのだ。

幸い少女の使つていた鉄パイプはほとんど劣化していなかつたので、こちらを使わせてもらつことにした。

文香は捨てられたパイプを見ながら口を開いた。

「まあ、 さうとも考えられるわね

「それはいいとして、 そろそろ一階の探索をしてみませんか？」

「待ち伏せを止めるってこと?」

中瀬が意外そうに言いつ。

「うん。自分から待ち伏せを提案しといてアレなんだけど、いつまでも此処に留まっていても仕方ない。もう一階には誰もいない可能性もあるし」

「相川くんの言いつ通り一階へ行くべきだと僕も思う。僕の解除条件に付き合わせてしまった所為で随分と遅れを取つていいだろうしね。それにつかは見切りをつけなきゃならない」

中瀬は相川と葉月の意見に納得したらしく、

「分かりました! 行きましょう」

と駆け足氣味で階段へ向かつた。

三人もそれに続いた。

一階の探索も一階の時と同じように行われた。

チェックポイントの位置を知る葉月が先導し、部屋には積極的に入って調べる。

二階には何か一階とは違うものがあるかと期待していた一同だったが、口クな物は見つからなかつた。

そして、大した物を見つけられないまま、一階に来てから五つ目の部屋に入ろうとしていた。

その部屋は扉だけ見れば今まで見てきた部屋とまるで変わらなかつた。

ただ、先頭を歩き続けていた葉月がドアに手を掛けた時に異変が起つた。

突然、彼らのPDAがアラームを鳴らし始めたのだ。

相川以外の三人は慌てて、PDAの画面を見る。

画面に表示されていたのは地図でも解除条件でも無く、簡潔なメッセージだった。

『あなたが入るうとしているのは戦闘禁止エリアです。エリア内で戦闘を行つと首輪が作動します。充分に注意して下さい』

「戦闘禁止エリア？」

相川が中瀬のPDAを覗きながら口にした。

戦闘禁止エリア自体はルールにも書いてあつたため、存在は知つていた。

けれど、実際に田の当たりにすると驚いてしまうものだ。

「とにかく、中に入つてみよう」

葉月が扉を開け、四人は部屋に入つて行つた。

部屋の内装は、今まで見てきた部屋の物とはかなり異なつていた。

広さは今までの倍以上、壁も無機質な灰色でなく、茶色をベースとした暖かい色だ。

外より一回り強い照明の明るさがそれをより印象的に演出し、部屋全体の雰囲気を部屋の外のそれとは丸つきり異なる物へと変貌させている。

床には絨毯が敷かれ、ソファーや、テーブル、ベッド等の家具類も充実しており、窓が無いことを除けば此処が高級ホテルの一室として紹介されても誰も疑つたりはしないだろう。

完全に参加者の休憩の場として用意されており、四人も早速此処で休息を取ろうとした。

部屋のソファーに腰掛けている男、先客が居なければ……。

男は遠目から見ても簡単に分かる程の長身で、がつしりとした体つきで、精悍な顔つきをしている。

歳は三十台半ばくらいだろうか。

男は「」ひからに気付き、ソファーから立ち上がり近づいてきた。

男も首輪をしている。

当然、ゲームの参加者だ。

相川が何かを言おうと思った矢先、男の方から声をかけてきた。

「そんなに警戒しなくても大丈夫だ。」ここでは戦闘は禁止されている

平和的な男の対応に四人の緊張はいくらか和らいだ。

「俺は情報交換がしたい。何せ、他のゲーム参加者に会うのはこれが初めてだからな」

言つと男は踵を返し、先ほどまで座っていたソファーの方へ引き返した。

そちらで話し合おうといつことだらう。

四人は男に続く。

相川は歩きながら、ある算段を立てる。

基本的に全ての参加者に言えるが、JOKERを持っている可能性、相川のPDAを奪つた『犯人』である可能性がある。

この男も例外では無い。

ならば疑つてかかるのが定石だ。

仲間の三人をシロとするなら、クロに成り得る参加者は九人。

JOKEERを持つている可能性、『犯人』である可能性、どちらもそれほど低くないのだ。

この話し合いで、この男に色々と仕掛けで見る必要がある。

もちろん、それにはリスクも伴つので慎重さが求められる。

故に相川は今までにない緊張を感じていた。

しかし、同時に気分が高揚してもいた。

JOKEERや相川のPDAが手に入るかもしれないチャンスなのだ。

優希とかりんの時にそのチャンスは無かつた。

もちろん、この男がJOKEERも相川のPDAも持つていなければただの空振りだ。

それでもやるしかない。

(やつてやる……。大丈夫、上手くやれる筈だ……)

第七話 「偽装」

男はつい先刻まで座っていたソファーに腰を落とす。

相川達は男と向かい合いつように別のソファーに腰掛けたことにした。都合良く、四人がちょうど座れるくらいのスペースがあり、背の低いテーブルを挟んで男と向かい合いながら座る形となる。

ソファーの中央には相川と中瀬が、端には葉月と文香が座った。

相川は肩に掛けていたスクールバッグを膝くらいまでの高さしかない畳の前のテーブルにのせた。

そして、軽く息を吐く。

空気と一緒に緊張と焦りが体から抜けっていくことを願いつつ。

大丈夫だ、と自分に呼び掛けて気分を落ち着かせる。

(まずはこの人のPDAのルール欄を如何に自然に見るか、だ)

相川は『犯人』のPDAに載っているであろうルールは推測の域を出ないが、断定済みだ。

「情報交換、ですよね？」

とりあえず、男に確認をとる。

「ああ、その前に名乗つておこつか。俺は高山……高山浩太だ」

「高山さん、ですか。俺は相川幸貴です」

「私は陸島文香よ」

「僕は葉月克己」

「中瀬美那です！」

次々と名乗る。

最後だけやけに声が大きかつたが、それについては誰も言及しなかつた。

「それで情報交換なんですが、まずはルール……ですよね？」

相川の駆け引きは既に始まっている。

体が緊張と興奮で支配され始めた。

「ああ、俺の知り得たルールは自分のPDAに記載されていた分だけだからな。ルールは是非とも教えて欲しいところだ」

「ルールはこれに全て書いてあります」

相川はテーブルに置かれたバッグから一枚のB5サイズの紙を取り出した。

ルールのメモだ。

ルールを把握していない参加者に渡す為に自分用とは別に事前に作つておいた物だ。

「全てのルールを把握済みか。しかし…」

「ええ。この紙を渡されても信用出来ませんよね。騙す為のウソが書いてあるかも知れない」

これは、誘導だ。

高山のPDAのルール欄を見る為の。

「そうだな。出来れば、PDAのルール欄を直接見せてもらいたい

ルール欄。

相川の思惑通りに話が進み始めた。

「そうですね。そして、それはこちらも同じなんですよ

「どういう意味だ？」

「俺達は全てのルールを把握していますが、四人のPDAで全てのルールが集まつた訳ではありません。他の参加者から教えてもらつたルールもあります。それも口頭で」

「なるほどな。つまり、そのルールに関してはPDAに記載されているのを見た訳では無いから真偽の確証が無い。俺のPDAのルール欄を見て、そのルールが載つていれば真偽がハッキリする」

無表情で返す高山。

「その通りです」

相川は冷静に返す裏で、興奮と若干の焦りを感じていた。

（良し、ここまでくれば後はもう……）

「となれば、お互いがルール欄を見せ合ひべきか

誘導は完璧だった。

この流れなら、高山由らPDAのルール欄を開示するだろ？

少し遠回りをしてルール欄を見ようとしたのは、PDAを見せ合いつのをこちらから要求したくなかったからである。

ルール欄を見せて貰うだけなら、ルールを全て把握仕切れていないので見せて欲しい、と頼めば充分ではある。

しかし、それでは自分達からルール欄の開示を要求し、それに高山が応える形になる。

高山が『犯人』だった場合、こちらが探しを入れていてる事に気付かれる可能性があるのだ。

だから、相川の方からルール欄の開示に話を持つしていくのは避けたかった。

そして、高山の方からルール欄の開示を要求するような形にしたかつたのだ。

こちらの疑いに気付かれない為に。

それに、高山が『犯人』でなくとも、高山の「相川達以外の参加者とはまだ接触していない」

というのが嘘だつた場合は厄介だ。

嘘だとすると、文香達が戦闘禁止解除前に七人で行ったルール交換について知っている可能性が出てくる。

そうなると、ルールを全て把握仕切っていないという嘘が通用しないかも知れない。

だから、嘘をつかなくて済み、尚且つ高山に疑つていてそれを露にルール欄を見る方法を選択した。

もちろん、敢えて疑つていて人に気付かせて心理戦に持ち込む手段もある。

だが、まだその段階ではないと相川は判断した。

相川はとりあえずメモを高山に手渡す。

（それにもかかわらずこの人、ポーカーフェイス、冷静沈着、おまけに理解力も高い。一番やりにくい相手だ）

高山は渡されたメモに軽く目を通してから、

「分かつた。では俺のPDAのルール欄から見せよう

その言葉で相川の緊張は一気に加速する。

（ルール欄にルール8とルール9が載つてたらほぼ確実にクロだ…）

血が普段より速く流れているような感じがした。

いや、相川だけでは無い。

中瀬や、葉月、文香も大きな緊張を感じていた。

今まで一人のやり取りに口を挟まなかつたのは、必要を感じなかつたからであり、相川の意図を理解していなかつた訳ではない。

三人も高山のルール欄が大きな意味を持つのは分かつている。

相川のPDAを奪つた『犯人』は誰とも接触しない内にルール8とルール9を知つていた筈だ。

だから『犯人』のPDAにはルール8とルール9が載つている、という相川の推理…。

あの時の推理は今の為にあつたのだと言える。

高山はポケットからPDAを取り出し、軽く操作してからこちらに画面を示してきた。

載つっていたルールは、ルール1とルール2と…。

ルール8と……ルール5だった。

ルール8は載っているがルール9はない。

相川は内容に良く目を通す振りをする。

「なるほど、ルール8とルール5ですか。分かりました」

相川が言つと高山はPDAをズボンのポケットに仕舞つた。

葉月、中瀬、文香の三人は高山に悟られない程度に肩の力を抜いた。

ルール9が載つていなかつたのだから、自然なことではある。

しかし、相川は高山のPDAのルール欄を見ても一切気を抜かなかつた。

まだ高山が『犯人』でないとは言えない。

『犯人』がJOKERを持つていれば、『犯人』がルール8とルール9の載つていないPDAを提示できる可能性もある。

つづづくJOKERは厄介な存在だ、そう思わざる得なかつた。

一応、『犯人』は奪つた相川のPDAのルール欄を見せることが出来るが、高山の出したPDAは相川の物ではない。

スミスというガボチャが言うには、相川のPDAにはルール8は記載されていないのだから。

相川は「では」、と話を切り返す。

「今度はこちらがルール欄を見せる番ですね。」

相川は相手がJOKERを持つているパターンの『犯人』も想定している。

だからこそPDAのルール欄の開示だ。

相川がルール欄の開示に誘導したのは、高山のPDAの欄を確認するためだけが目的ではない。

むしろ、今となっては、こちらがPDAを開示することこそが本命だ。

（相手がJOKERを持っているかには関係なく、今度の仕掛けは『犯人』ならボロを出す可能性がある）

もちろん、相川はPDAを持たないので、PDAの開示は他の三人に任せるしかないが、そんなことは三人も分かっている。

相川の言葉の直後に中瀬が制服からPDAを取り出す。

「ルール3とルール8が載つてます」と、『丁寧に宣言した後にPDAを差し出した。

画面には言葉の通りのルールが表示されていることだらう。

高山は示された画面を確認し、相川の渡したメモに視線を落とす。メモに偽りが無いかチェックしているのだ。

「分かった。もう充分だ」

高山がそう言つと、中瀬はPDAを制服のポケットにしまい込む。

続いて、葉月がPDAを見せる。

こちらのPDAを見せると宣言した相川はPDAを提示する気配は無く、高山のやり取りをただ見るだけだ。

見せるPDAが無いので、当然と言えば、当然なのだが、事情を知らない人間が見れば不自然に映る。

何しろ、これまで高山との交渉に積極的で、こちらのPDAを見せると言つた張本人なのだ。

それがいざPDAの開示になるとPDAを用意する素振りすらしない。

確實に高山は怪しむだろう……………事情を知らなければ。

そう、つまり逆を言えば相川がPDAを持っていない、という事情を知つてゐる『犯人』は何ら不思議に思わないのだ。

相川はPDAを持っていないのだからPDAを見せる素振りを見せないのは当然だ、と一人で解決し、その相川のPDAについての発

言は控える。

百パーセントではない。

高山が『犯人』であつても、あたかも、相川がPDAを持たない事実など知らない、といった対応をする可能性もある。

そうなれば、相川がPDAを見せる気が無いのを見た際に、高山は敢えて相川のPDAの開示を要求する。

しかし、そこまで頭が働く人間の方が少数だろうし、何より『犯人』は出来るだけ相川のPDAを話題に挙げたく無い筈だ。

犯行を疑われている犯人がわざわざその犯行についての話をしたがつたりするだろうか？

だから、高山が『犯人』である場合は相川のPDAの見せようがない態度について特に言及しない可能性が高い。

高山が『犯人』でないならば相川のPDAについて言及する可能性が高い。

相川はそこを利用する。

見れば、高山にPDAを見せるのは三人目、文香の番になっていた。

相川は高山に対する注意と緊張を高めた。

(高山さんが文香さんのPDAを見た後…どう出るか)

高山の「もつ結構だ」という言葉を受け、文香はPDAをしました。

相川の体により一層強い緊張が走る。

(「()で、高山さんがどう対応するか

自然と高山に対する注意も強くなる。

高山は相川の渡したメモに目を落としている。

(「()後に、俺のPDAについて触れずに話題を変えるようなら……」
……)

そして、高山が次に発した言葉は……。

「相川、お前のPDAを見せてくれ」

相川のPDAについてだった。

「いえ、俺のPDAのルール欄に載っているのはルール4とルール8ですので見せる意味は無いでしょう」

ルール4は文香のPDAに、ルール8は高山のPDAに載っているのだ。

それについても、高山のPDAのルール欄についても、今のやり取り

についても、高山が『犯人』であると判断出来る根拠は得られなかつた。

（この人はほぼシロ、か？もう少しだけ、仕掛けてみるべきか？）

相川の葛藤とは反対に高山の態度は冷静そのものだつた。

高山は相川に「そつか、分かつた」と、返すと相川のメモを小さく畳んで仕舞つた。

余りにも淡白な対応なので、納得しているのかどうかも判断できない。

このやり取りで高山が真偽が確認出来なかつたルールは一つ。

賞金に関するルール、ルール6だ。

これに至つては、相川のメモに書かれていただけでPDAに記載されているのを見た訳ではないので判断できない。

だが、それ以外のメモの内容は正しいものだと確認が取れているのでこのルールも十中八九、真実だと踏んでいた。

「ルール交換も終わつた訳ですし、互いのこれまでの経過報告でもしますか」

相川の提案に高山は同意する。

「ああ。俺は他の人間と接触していなから、大した事は話せないとは思うが」

「それはこちらも似たようなものです」

「そうか。では、俺から話すとするか」

相川と高山はこれまでの自分達が見てきた事を報告し合つた。

高山は他の参加者と接触していないので、あまり有益な情報は無かつた。

相川は自分のPDAが奪われた事については伏せておいたが、それ以外の事は隠さずに話した。

経過報告が終わると、相川から次の話を切り出した。

「では高山さん、俺達と協力しませんか？」

それは唐突な提案だった。

黙つて考え込む高山を待たずに相川が付け加える。

「と言つても、互いの解除条件を知らずに協力するのは無理ですかね。解除条件、教え合いませんか？」

高山は自分のPDAを取り出しながら、
「ああ。俺もお前達の解除条件次第では協力してもいいと考えている」

「じゃあ、まずは俺の解除条件から見せますよ」

相川はそう言つと、正面に置かれたスクールバッグに手を入れる。
もちろん、中にPDAなど入っていない。

これは演技だ。

相川は高山に悟られないように反応を窺う。

高山が相川はPDAを持たない事を知る『犯人』だとすれば、予想外な相川の行動に何らかの反応があつてもおかしくは無い。

だが、相川の目にはいつも通り無表情な男の姿しか映らない。

（これは本当に俺のPDAの事は知らないか。いや、そもそもこの人に対して動搖を誘うことそのものが間違つてたか？）

相川はバッグを探る手をピタリと止め、思い付いたように言つた。

「よく考へると、高山さんが俺達に提示出来る解除条件は一つだけです。ならば、協力を約束出来ない内にこちらが四人全員の解除条件を提示するのは不公平じゃないですか？」

実際は思い付きでは無く用意された台詞だった。

「ふむ、そういう考え方もあるだろ?」

「だから、こちらの提示するPDAも高山さんが提示するPDAもまずは一つ。その後に互いに協力するか判断する。協力を取り決めた後にこちらの残りの解除条件は徐々に教えます」

高山は少し考え込む様子を見せた後に返答した。

「分かった、それで良い。では、俺からPDAを明かそう」

高山は自分のPDAの画面を相川に向けてきた。

表示されていたのはスピードの2°。

それに対して相川が何か言う前に、文香が自分のPDAの画面を高山に見せた。

「私のPDAは6番よ」

文香の解除条件は人に知られてもデメリットが少ない。

しかも、高山の解除条件と相性が良い。

だからこそ、率先して解除条件を明かしたのだ。

高山は文香のPDAを見ると、僅かに表情を緩ませた。

「どうやら、相性の良い解除条件らしいな」

高山はPDAを仕舞いながら話を続けた。

「6と2、どちらも「OKERが必要な解除条件で相性は良い。俺は協力可能だとは思うが…どうだ?」

四人全員が首を縦に振る。

「だが協力可能とは言つても、俺は完全にはお前らを信用出来ない。それはお前達も同じだろう。だから俺は部分的協力を提案する」

「部分的とは?」

「これを使う。一階の部屋で手に入れた物だ」

高山は胸ポケットからマッチ箱ぐらいのプラスチック製の箱を一つ取り出した。

「何ですか、それは

「1JいつもPDAに近づければ分かる」

言つて、一つの内の一つを相川に渡した。

相川はちよびPDAを持つ文香に渡した。

すると、文香のPDAからアラームが鳴り始めた。

例によつて画面の表示に変化があつた。

画面には長々とプラスチック製の箱についての説明が表示されていた。

『「JのツールボックスをPDAの側面の「コネクター」に接触することで、PDAに新たな機能をもったソフトウェアを組み込み、カスターマイズすることが可能です』

『「ソフトウェアを組み込めば他のプレイヤーに対して大きなアドバンテージとなります。強力なソフトウェアは起動するたびにバッテリー消費が早まるように設定されています』

『「使いすぎてPDAが起動できなくなり、首輪を解除できなくなる事がないように注意しましょう。なお、一つのツールボックスでインストール可能なPDAは一台のみです』

『「どのPDAにインストールするかは慎重に選びましょう』

相川は文香の画面を覗き、内容を確認した。

最後まで田を通すと、真横に向けられていた視線を戻し、高山に尋ねた。

「なるほど、便利な物みたいですが、どうしてこれを俺達に？」

「このツールボックスは少々特殊でな。一人以上で用いなければ意味が無い」

高山はツールボックスを自分のPDAにコネクトした。

「こうすれば、ツールボックスの機能が表示される」

文香は高山に習い、ツールボックスをコネクトした。

「彼女のPDAにも表示されているだろうが、このソフトウェアはインストールされた一台のPDAで通話を可能にする物だ」

「ええ。 そうみたいね」

文香は画面を見たまま頷く。

「これを互いにインストールすることで、部分的協力をすることですか」

「そうだ。俺もお前達もJOKERのPDAが欲しい。だから俺とお前達は行動を共にはしないが、どちらかがJOKERを見つたら連絡する。探すだけなら別れた方が効率もいい。もちろん、俺はJOKERを見つけても破壊せずに連絡しよう。JOKER関連でなくとも何かあれば連絡する方針で構わない」

「分かりました、それで行きましょう。ただし、一緒に行動しない内は俺達の解除条件を明かすことは出来ませんよ？ソフトウェアを使って口頭で教えても意味はありませんし。完全には信用出来ない今の段階で残りの解除条件は教えられませんしね」

「ああ、それでも構わない」

「そうですか。それじゃあ、問題はこちらが誰のPDAにインストールするか、ですね」

一応ツールボックスには、バッテリー消費というリスクもある。

「私はどのPDAでも問題は無いと思うけど…」

文香は言いながらツールボックスをPDAから取り外した。

「美那ちゃんがさつきからやってみたいオーラを出しまくってるのよね」

文香は笑みを浮かべて、ツールボックスを中瀬に渡した。

実際は、中瀬は特別な振る舞いはしていなかった。

ただ、ゲーム終盤まで持つ必要のある中瀬のPDAが適任と判断しただけだ。

「えっと、ijiを『ネクトすれば良いんでしたっけ

中瀬はPDAを受け取ると戸惑いながらもツールボックスをPDAにコネクトする。

「ああ。その後に『インストール』という表示を選択すればインストールが開始されるらしい」

高山はPDAを操作し、インストールを開始した。

中瀬も高山に続いた。

インストールは三十秒ほどで完了した。

「念のため、試運転をしておくか

「はい、分かりました」

中瀬はソファーから立ち上がり、高山達と少し距離を取つた。

そして、ソフトウェアの機能で高山のPDAにコールする。

コールを受けた高山がPDAのボタンに触れ、互いのPDAが通話状態になった。

「聞こえるか」と高山がPDAに向かって呟くと、『バッヂリです』といつて中瀬の声がPDAのスピーカーから返ってきた。

高山はそれを確認すると、立ち上がつた。

「俺はそろそろ行く。休息は充分に取つたからな」

「分かりました。JOKERを見つけたり、何かあつたら連絡します」

「ああ。俺も何かあれば彼女のPDAに連絡する」

言つと、高山は部屋から出ていった。

高山が閉めたドアの音。

数秒の沈黙。

そして、部屋に残された四人はため息を吐き、力を抜いた。

「緊張した」

中瀬が最初に声を挙げた。

「でも、相川くんの『PDA』を奪った犯人では無さそうだし、協力できそうだし良い人と会えたと僕は思つ」

「そうね。それに、解除条件の相性も良い」

そんなやり取りを見て相川は考え込むように言った。

「俺はそこまで楽観しない方が良い」と思つます

「どういつ意味だい?」

「高山さんの見せた2のPDAはJOKERで、『犯人』である可能性も充分にある。信用するのは早いんじゃないかって話です」

「確かに、幸貴くんの言つことも否定出来ないわね。それにもし高山さんがJOKERを私達に見せていたとしたら、高山さんは相当厄介な敵となる。何せ、偽装したJOKERを見せるというリスクのある選択をしながらも、表情一つ変えなかつたのだから」

「その『リスク』とやらを高山さんが負つたかは分かりませんがね」

「偽装したJOKERを出すのはリスクがあるでしょ? JOKERで騙そつとした事がバレると不味くないかしら」

文香の言つ通り、偽装したJOKERの提示はそれなりにリスクがある。

偽装が見抜かれない保証は無いのだから、JOKERを出すよりは

PDAの提示そのものを避ける方がベターな場合もあるだろう。

しかし、相川の返答はそんな一般論を簡単に否定するものだった。

「それが案外そうでも無いんです。少なくとも、高山さんが『犯人』だった場合は偽装したJOKEをノーリスクで見せられます」

第八話 「JOKERの性質」

ノーリスク…。

それは、JOKERを自分のPDAとして提示するにはそれ相応の危険が伴うという前提を覆す。

何やら大事な話になつてゐる、そう感じた中瀬は相川達の元へ戻り、高山が腰を下ろしていた方のソファーに座つた。

「ノーリスクでJOKERを出せるとここのはJOKERの偽装が絶対にバレない方法があるということよね？」

「そうなります」

「JOKERを見せる相手の首輪の解除条件を知らずとも？」

「知らずとも、です」

普通に考えれば、ノーリスクで偽装済みのJOKERを提示する事はできない。

JOKERを使って騙すとしてることを見抜かれ、信用を失う恐れがある。

それは、文香だけでなく、中瀬と葉月も考えていた事だ。

「想像がつかないわ。説明してもらえないかしら」

「……ですか」

あつさつと承した。

文香と葉円は半信半疑。

反対に、中瀬は期待の眼差しを相川に向ける。

「でも、リスク無しでJOKERを提示する方法の前に、俺が高山さんのPDAはJOKERではないかと警戒する理由から話します」

「理由も何も、JOKERでないと証明出来ないからだらつ。」

「それだけじゃないんですよ、葉円さん。まず、JOKERの偽装について少し考えてみましょ。JOKERを使って相手を騙し、共闘関係を築くことはPDAに偽装をせるのが一番良いのか」

「まずA、3、9に偽装はしないだらつ。そんな解除条件を見せられても騙されるどころか、かえって警戒する」

「そうですね。JOKERだとバケなくても信用されない解除条件では意味がない」

「その点では、10や11偽装には向かない番号ですが、俺は4、5の方が

向いてなこと思こま」

「どうして？」

「考えて下さい。仮にＫに偽装し、それを自分の解除条件と偽り、仲間に取り入るとする。でも、あつさりPDAが五台以上集まつたりしたら、さあ大変。解除条件は満たしたのだから首輪を解除してみろつて流れになりますよね。当然、首輪は解除できないからJOKERを使つていた事が見抜かれる」

「なるほど…」

「4でも同じ事が言えますし、5のPDAに偽装して仲間になつても、嘘の解除条件の所為で不必要的移動を強いられる。これは7も同じですね」

「となると、かなり限られるわね」

「はい。今拳がつたのを除くと2、6、J、Qですね。JとQは解除条件の為に特別な負担が強いられないしひーム終了間近まで解除条件を満たさないという保証がある。2、6は解除条件が負担を強いる可能性はあるが、条件を満す」とは決してない」

2、6はJOKERが必要なのでJOKERが一台以上ない限りは解除条件は達成されない。

「さて、Jの4つなら皆さんは何に偽装します?」

相川が軽く笑みを浮かべながら言つ。

「Jの4つならどれでも同じじゃないかしら?」

「そんなことはありませんよ。結論から言つと、2に偽装するのが一番良い。だから高山さんのPDAがJOKERでは、と疑つたん

です

「2が一番良い」とする理由は何かしら?」

「2に偽装すれば偽装がバレにくい。それだけです」

「偽装がバレにくい?」

「ええ。そもそも、JOKERの偽装がバレるのには二つのパターンがあります。一つはさつき話した通り、嘘の解除条件を達成してしまった場合です。これは2、6、J、Qにはあまり関係ありません。二つ目はJOKERの番号が見せる相手のPDAの物と重複した場合。そして、最後に2の特殊効果で偽装が解除される場合です」

相川が言い終わると文香が何かに気付いたように、あつ、と呟いた。

そんな文香の様子に気付いた中瀬が尋ねる。

「どうしました?」

「分かったわ。2は他の番号より偽装に気付かれにくい理由が

「分かったんですか!?私はサッパリなんですけど」

「僕も今の説明じゃ、良く分からなあ……」

分かる組と分からぬ組で半分に割れた。

「考えてみれば簡単な話なんですよ」

相川が言つ。

「例えば、Jに偽装したJOKERを見せる場合は相手が2かJかのどちらかのPDAを持っていただけで偽装が見抜かれる。対して、2に偽装した場合は相手が2のPDAを持たない限りは偽装を見破られない」

そう、2に偽装した場合のみ、番号が重複するのと、特殊機能により偽装が強制解除されるのは同時に起つるのだ。

説明に対し、中瀬と葉月が先ほどの文香と同じような反応をとる。「だから、2は偽装が見抜かれにくく、JOKERは2に偽装するのがベストなんですよ」

「それで高山さんの出したPDAはJOKERかもしね、という訳かい」

「やうじいことです。もちろん、本物の2である可能性も同じくらいいあるとは思いますが……」

「確かに、JOKERは2に偽装すればローリスクで済む。でもノーリスクでは無いわ」

「ええ、ただ単に見せるだけではノーリスクとは行きませんね」

相川は簡単に答えた後、そつと言えど、と思い付いたよつて中瀬に話を振る。

「前に俺は言ったよね。2の特殊効果も良い事ばかりじゃないって

「ナリだっけ？」

「ほり、文香さん達が見張りしている間にさ」

中瀬は「ああー」、と感嘆の声を挙げる。

「そう言えば、そんな事も言つてたねーそれで、それが今の話に関係あるの？」

「もうりん関係ある」

得意げに返す。

「2の特殊効果によるデメリットは「」一つは「JOKERの偽装に適しているところ反面、本物の2を提示してもJOKERでないかと疑われ易いという点。もう一つは自分の意思で、特殊効果を unusedできないという点」

「自分の意思で、特殊効果を使えないのが……デメリット？」

「そう。自分の意思で使用不可能な所為で2の偽装解除の効果は、JOKERを見つけるという特性よりもJOKERを持つ参加者に自分が2を持つことなどを教えてしまつてこの方面の方が強くなっている」

「なるほど」、「確かに」と文香と葉月は納得してみせるが……。

「えっと、どう……？」

中瀬は理解仕切れていないらしい。

「「めん、 説明の仕方が悪かった

相川は軽く笑いながら詫びた。

「簡単に言つとさ、2のPDAつて所有者の意思に関係なく半径1m以内のJOKERの偽装を解除する訳。だから、JOKERの所有者と2のPDAの所有者が接触した時、JOKERの所有者は偽装させたJOKERを定期的にチェックし、偽装の解除を確認すれば誰が2を持つてるか分かる。ところが、2のPDAの所有者はJOKERの存在には中々気付けない。これが2のPDAの特殊効果のデメリット」

「な、なるほど」

「しかしどうして、この事が高山さんがJOKERをノーリスクで提示する方法に繋がるんだい」

葉月が尋ねる。

「さつきの考え方を少し応用すると、JOKERを使って2のPDAが近くに有る事が分かるだけでなく、2が近くに無いことも確認可能ですね」

「確かにそうだけど、2の特殊機能の有効範囲である半径1m以内に近く必要があるわね」

「その点は大丈夫でしょう。俺達と高山さんは互いにPDAを見せ

合った。偽装解除の有効範囲には充分入っていたハズです。そして有効範囲に入っていた確認があるならあとは偽装したJOKERを確認し、俺達が2のPDAの所有者でないことを確かめた上で2に偽装したJOKERのPDAを提示出来る

「なるほど。それなら番号の重複も特殊機能の偽装解除も心配する必要がない。つまり偽装が見破られることはない」

文香は言いながら頷く。

それとは対照的に、葉月が疑問を投げ掛けた。

「しかし、高山さんは相川くんのPDAを見ていない。ということは、自分のPDAが相川くんのPDAの半径1m以内に入っていたかは分からぬ。これではノーリスクとはいきないんじゃないか?」

「ええ。だから最初に言つたんです。高山さんが『犯人』ならノーリスクでJOKERを提示する方法が存在する、と

高山が『犯人』ならば、相川のPDAを持つているのは高山自身だ。相川のPDAを見ていないから、とはならない。

「なるほど。確かにその通りだ」

葉月が納得してみせる。

と、中瀬がやや頭を悩ませながら確認する。

「えーと…。つまり、まとめるといいのかな?」高田さんが『

犯人』なら幸貴くんのPDAを持つてるから警戒するのは三人のPDAだけ。ルール欄を見せ合つた時に『JOKERの偽装を確認して三人のPDAに2が無いことを確認する。その後に2に偽装した』OKERを出しても偽装はバレない』

「やつこいつ」と

相川が調子良く答える。

百点満点、と付け足そつかとも思つたが調子に乗りそつなので止めておいた。

「じつかしまあ、今更ここまで考えられるわね」

文香は感心を通り越してやや呆れ気味だった。

以前の『犯人』のPDAのルールの特定や、今回の『JOKER』に対する考え方。

果たして彼と同じレベルで物事を考えられる参加者が他にいるどうか。

少なくとも自分には無理だ。

文香はそう感じていた。

「幸貴くんは昔から頭が良かつたよね

「頭が良い、悪いといつぱり要是良く考へるか考へないかの差だと思つんだけどな」

「いやいや、それを踏まえても大した物だと僕は思つよ」「みつ

「まあとにかく、このゲームは良く考えなきゃ生き残れないと思いません。特にPDAを持たない俺の場合は」

言葉の最後の方は自然と自嘲氣味になつた。

「確かに良く考えなきゃ生き残れないでしょ? でも、他にもやらなきゃ生き残れない事があるわよ?」

「何ですか、それは」

「食事よ、食事。人間は食べなきゃ生きて行けない。休息や水分は少し取つたけれどゲーム開始から今までまともに食べてないでしょ? 幸いこの部屋は戦闘禁止でキッチンもあるし今から食事にしない?」

「そうですね。食べられる時に食べておきましょ?」

「じゃあ決まりね」

言うと文香は食材の入った荷物を抱えて部屋の隅にあるキッチンの方へ向かつた。

「あつ、私も手伝います」

中瀬が文香を追う。

ソファーには葉月と相川が残された。

同時刻。

館内とのある一室でPDAを操作する一人の女性の姿があった。

スーツを着こなし、品のあるその風貌はこの飾り気の無い建物には些か不釣り合いに感じられる。

PDAの操作が上手く行かないのか、もしくは自分にとつて都合の悪い情報が表示されているのか、彼女の表情はやや険しかった。

視線はPDAの画面を捉え続けている。

イラだつたようにハイヒールの爪先で地面を叩く。

何かを待つているのかもしれない。

カツカツといつ氣味の良い音が部屋に響く。

彼女が諦めた様に息を吐き、PDAに指を伸ばそうとした時、PDAのスピーカーから声が飛んできた。

『すいません、郷田さん。お待たせしてしまって』

声は若い男の物だった。

「どうなつてゐるのー? ゲーム開始から全く連絡が取れないなんて!」

今までの不満を爆発せしむるよじて声を荒げた。

『すいません。色々とトラブルが重なりまして』

「そのトラブルの所為で配られるPDAにミスがあつた訳ね? 本来なら私は5のPDAだつた筈なのに。お陰で私もゲームクリアに少々手間取りそうだわ」

『申し訳ありません』

「それと、5のPDAに付いてるゲームマスター専用の特殊機能はストップさせているんでしょうね! ?」

『それは勿論…』

「…ならいいわ」

『しかし、郷田さんが非常用のパスワードを覚えていて助かりましたよ。それを覚えていなければ、今私と通信しているそれもただのPDAだった』

『ゲームマスターが専用のPDA以外でもその権限の使用を可能にする為のパスワード……ね。使つたのは今回が初めてだわ。と言つたり、ルール4のパスワード自体、入力するのは初めてよ』

『やうでしょうね。JOKERを持たなければ意味の無い物ですか

「それで、トラブルっていうのは何かしら？」

『ええ。実は参加メンバーに若干ながら急遽変更がありましてね。その所為でPDAの配布にミスがあつたみたいです』

「参加者に変更？」これまで私が接触した六人は予定通りの人間だつたと思うんだけどね』

『郷田さんはまだ接触していませんね。今回、急遽不参加になつたのは御剣総一と姫萩咲実の二名です』

「変更の理由は何？」

『参加予定の御剣総一が家から中々出なくなりましてね。一時的な引きこもりとでも言うんでしょうか。とにかく無理やり連れ込むのは無理があると判断しまして、御剣の参加は見送られました。当然、姫萩は御剣が居てこそ価値のある参加者なので同様に参加が見送られました』

「その二人の代わりは？」

『相川幸貴と中瀬美那。一人とも高校生です』

「別に高校生に拘る必要は無いと思つんだけどねえ」

『詳しいデータは後でPDAに送ります。実際に各参加者に配られたPDAの一覧も載せときますよ』

「お願ひするわ。それで今のところの状況はどんな感じかしら？」

『参加者は十二名全員が生存してますね。参加者のほとんどが二階にいます。今までこれと言つた大きな戦闘は起きてませんが、少々厄介と言つた、面白い事になつてますよ』

「面白い事？」

『はい。実は比較的早く目を覚ました参加者がまだ目を覚まさしていない他の参加者のPDAを奪つという事がありましてね』

「あら、珍しいことが起こつたものね」

感心したような、馬鹿にしたような、どうひとも言へる口振りだ。

『それが原因で相川幸貴はPDAを所持していません。しかし、この相川つてのが中々面白い少年でしてね。PDAを奪つた犯人を自分なりに推理して見つけるつもりらしいんですよ』

「PDAを奪つた人間を見つける、ねえ。かなり厳しいと思つただけれど」

『ところが彼の推理が中々面白い。ルール欄や、JOKERの性質を巧みに利用した推理なんですがね……まあ、詳しい事は後でまとめてPDAに送ります』

『そつして頂戴。それにしてもPDA無しでゲームスタートだなんて厄介ね。しかも中途半端に推理なんてするからエクストラゲームを与えてもらえない』

『まあ、相川以上に厄介な状況の参加者もいますしね』

「あら、 そうなの？」

『まあ、 詳しい事は後で確認して下さー』

「そういえば、 B E T の方ははどうかしら？」

『一番人気は相川ですね。 彼が自分のPDAを見つけることが出来るかどうかの賭けだけでも相当盛り上がりますよ。 他に人気なのは高山浩太、 手塚義光の二人ですかね』

「じゃあ、 その辺りの誰かにサブマスターを付けさせて頂戴」

『それは彼女も承知しています』

「そう。 なら良いのだけれど…。 」

『しかし、 今回のゲームは中々面白い事になりそうですよ』

「面白く『する』のが私達の仕事でしょうが。 それに今のところは膠着状態

見てて面白いのは相川って子がPDAを盗られたことだけでしょう？』

『そうだとも言えますし、 そうでないとも言えますね。 相川がPDAを盗られた以外にも面白い事が起こっている、 と言つておきましょ。まあ、 詳しい事は…』

「後で送る、 でしょ？』

『はい』

「それじゃあ、もう切るわよ」

『分かりました。データは出来るだけ早く送りますが、送るのは十分後くらいになると思います。何せ情報が多くてまとめるのに時間が掛かりますからね』

郷田と呼ばれた女性は、分かつたわ、と返事をして通信を切った。

「さて、やることが色々と出てきたわね

彼女は部屋を後こうした。

第九話 「統率者」（前書き）

状況を整理するために所有が明かされたPDAのまとめを前書きに
書いておこうと思います

相川幸貴…（無し）
中瀬美那…（Q）
葉月克己…（5）
陸島文香…（6）
高山浩太…（2）
その他不明

JOKERなどの可能性は考慮せず、所有が明らかになつたPDA

Aの番号です

第九話 「統率者」

相川達は高山と話した時と同じようにソファーに腰を掛け、文香と中瀬で用意した食膳を乗せたテーブルを囲っていた。

「やっぱ中瀬さんが俺と会つ前に見た人って高山さんだったの？」

食事中、相川が思い付いたように尋ねた。

「あ、言い忘れてたね、そういえば、遠田だったから絶対じゃないけど、多分高山さんで間違いないと思うよ」

「やっぱ、そうか」

中瀬の言っていた男の容貌と高山とが余りに一致する点が多かったから勘づいてはいた。

「直接聞いてみる？」

中瀬は食器を置き、笑顔でPDAを耳元に当てる。

確かに中瀬のPDAは高山のPDAと通信できるが…。

「止めときなさい、美那ちゃん。PDAは玩具じゃないし、バッテリーの制限もあるんだから」

文香が中瀬の悪ふざけを窘める。

中瀬はすまそうに笑う。

「はは、すいません」

中瀬はPDAを仕舞い、皿に手を伸ばす。

「でも、これでまだ一度も会えてない人は一人だけになつたわけだ」

葉月が言った。

「え？ そうでしたっけ？」

中瀬が首を傾げる。

「いや、僕と文香君は、といふ話を」

「そういえば、となるわね」

文香が記憶をたどりながら指折りをする。

「残り一人、どんな奴でしょうね」

「小学生くらいの女の子もいたくらいだし、呆け老人がいたつて私は驚かないわよ」

「呆け老人……ですか」

「ま、流石に無いでしょうけどね」

文香は肩をすくめて苦笑する。

「やつですね……」

「」の人は「」まで「冗談か分からないからな、などと相川は考える。

そんな平和な思考を切つて落とすかのよつに。

「話は変わるけど……」

文香は苦笑いを作つていた顔を真剣なものに変える。

そして視線の先に相川を捉え続けたまま、言つ。

「幸貴くん、あなた随分頭が回るみたいだけど、直観はある?」

「え? いや、さつきも言いましたけど、頭の良し悪しじゃなく、良く考えるかやうかが……

「それは分かるわ」

言い終わる前に文香が遮る。

「考えるか考えないかが重要なのは分かる。コンピューターだつて起動させなきやただの箱。でもね、そういう話をしているんじゃないわ」

文香は手に持つ食器を置き、スプーンと皿が短い金属音を奏でた。

「言つなれば、そのコンピューターの性能が違うのよ、あなたと普通の人では。自覚があるでしょ?」

「まあ、自分は頭が悪いとは思つてないんですけど…。それでも文香さんが言つほど大したものじゃないですよ」

幾らかばつが悪そうに答える。

「確かに、あなたの言つ通りそんな大袈裟なものではないかもしない。でも、少なくとも、たかが13人ぼつちしかいないゲーム内なら貴方より頭の回る人間はほほいない。私はそう確信してるわ」

「そうだと、いいんですけどね……」

相川は一人言のように呟いた。

自覚が無い訳では無い。

頭の回転には多少の自信がある。

そうでなければ、高山の時に率先して交渉しようとはしなかつただらう。

しかし、だからと言つてこのゲームで一番だとは考えていなかつた。

文香とのやり取りは謙遜の意味も強いが、それ以上にこのゲームにはとんでもない奴が潜んでいるかもしれないという不安があった。

こんなふざけたゲームに選らばられるくらいだ、頭の出来が凡人のそれとは全く違うような天才だつているかもしない。

もし、そんなのが居たら当然、凡人の中でも少しばかり優秀である程度の相川では太刀打ち出来ないだろ？

だから、態度だけでなく心構えとしても謙虚に行こうと相川は考えていたのだ。

「ま、私が言いたいのは幸貴君がどれだけ頭が良いかって話じゃないんだけどね」

文香は表情を崩し、相川に笑い掛ける。

「じゃあ、どういう話なんですか？」

「少なくとも、この四人の中では幸貴君が一番、つてことが重要なのよ」

「四人で一番、ですか」

「謙遜しなくとも良いわよ、事実な訳だし」

相川が何か返そうとする前に文香は続けた。

「だから、貴方にこのチームのリーダーをやつてもらいたいのよ」

「リーダー、ですか」

柄じゃない、と相川は思つ。

「適任じゃないかしら？あなたは一番優れた作戦を立てられる人間よ。そんなに责任感を感じる必要もないわ、参謀的なポジションと

考へても良いかもしない。まあ、あなたの場合は自分の事で精一杯かもしないけれど」

「まあ、皆がそれで良いって言つたら俺はそれで良いですけど」

文香は葉円と中瀬の方を向く。

「一人はどう思う?」

すると、直ぐに同意が返ってきた。

「私はそれで良いと、思いますよ。幸貴君がリーダーで」

「僕も賛成だなあ」

文香はそれを受けて、満足そうに相川の方に向き直る。

「と、言ひ訳よ」

相川は一拍間を置いて、返事をした。

「分かりました。やります、どいまでの事が出来るかは分かりませんが」

相川は中学の部活でも一度こんな感じで部長になつたな、などと思い返す。

「せつててくれるると助かるわ」

「でも具体的に何をやればいいんですかね?」

「やうね、やつぱり行動の方針を決めたり、高山さんの時みたいに積極的に交渉するとかじやないかしら」

「なるほど、分かりました。交渉と言えば文香さん、高山さんの時ヒューリックの番号を開示してくれたのは助かりました」

「ああ、アレね。あの場合は私が出すのがベストだと思つたのよ。出過ぎた真似だつたかしら？」

「いいえ、そんなことはありませんよ。あの場合はアレがベストでしょ」

「うわ、と話を中瀬に振る。

「中瀬さんも、ルール欄の開示の時は率先してくれて助かった」

「うふ。あれで良かつた……よね？」

「もちろん。……つと、やうだ、まだ言わなきゃいけないことがあるんだつた。首輪の解除条件なんだけど、中瀬さんは極力開かさない方が良い」

「Aの人に狙われるからつてこと？」

「そこまで単純な話だけじゃないかも知れないけど、とにかく極力開かせないよつて」

「うん、分かった」

「それとは逆に、文香さんは解除条件を明かす」と消極的にならなくて良いかも知れませんね」

「もうね、明かすことじで「ORKERの持ち主が交渉を持ち掛けてくるかもしれないしね」

「2や6のPDAは解除条件を明かすことじでのメリットが期待できる数少ないPDAだろう。

「葉月さんは…5のPDAだからどちらとも言えないんですけど、明かすのは何時でも出来るので慎重に、へりこしか言つことないです」

「ああ、分かった、そうするよ」

「早くもコーダーっぽくなつてきたわね」

文香が笑顔を作る。

「もうですか?そこまで自信は無いんですね」

「貴方は頭が良い。自信を持ちなさい」

「さうだよ、幸貴くん。中学の時だって成績凄かつたじゃん

中瀬が励ますように言つ。

「もうや、もうじょじつね

文香は納得したように頷いた。

すると、何故か中瀬が文香と葉月に対し、相川が中学の時に如何に凄かつたかを自慢気に語り出した。

「幸貴君は中学の時から……」

相川は意識的に聞かないよつこじ、空になつた皿をテーブルの隅に寄せた。

ここに来る前からの荷物の中に、役に立ちそうな物は無いかと、スクールバッグを漁る。

セロハンテープ。

一階で紙を扉に張り付けるのに使つたが、他にも役に立つかも、と考えてると、中瀬の話が耳に入る。

どうやら、相川はかなりのインテリキャラに仕立て上げられているらしい。

これでは、歴史科目は壊滅的に苦手だという話は出来なくなつたなと思った。

先日に行われた学校の定期試験の日本史。

自信を持つて書けた解答は『北条時政』だけだつたなんて自虐ネタは口が裂けても言えそうにない、そう思つのだつた。

それは相川達が食事と休息を終え、戦闘禁止エリアを出て5分も経たない内の事だった。

葉月と文香が出会えてない最後の一人、女性が相川達の前を歩くのが見えた。

距離は30mくらいだ。

女性はフリルの付いた黒い服を着ていた。

ゴスロリ装束というやつだろうか。

先頭を歩き、最初に彼女の姿を見付けた葉月が後ろの三人に静かな声で呼び掛けた時、彼女がこちらに気付いた。

あちらは女性で、見れば武器無しの丸腰。

こちらは武器を持つ男一人と女性二人の計四人なので襲われるような心配はほとんどないと言つて良いだろうが、全く警戒するなというのも無理な話だろう。

自然と武器を持つ手に力が入る相川と葉月だったが、そんな一人の緊張が馬鹿馬鹿しく思えてしまつほど気の抜けた声が飛んできた。

「すいませ～ん。ちょっとお聞きしたいんですけど」

妙に間延びした声と共に女性がこちらに駆け寄つて来る。

その様子はまるで人に道を尋ねようとしているかのようにも映る。そんな緊張感の無い女性の対応に相川達はすっかり警戒心を解いてしまつた。

女性は相川達に近付くと、先ほどと同じ調子で尋ねた。

「すいませ～ん。これは一体どこなんでしょうが～」

相川の第一印象は、ふざけた格好に緊張感の無い口調で、間抜けな質問をする女性だな、だった。

もちろん、声にも顔にも出さずに応対する。

「えっと、状況が全然掴めてないんですか？」

相川は一步前に出て、先頭に立つ葉月と並ぶ。

「はい～。何だか、気付いたらこの建物に居たんですよ～」

（何だか知らないがこの人の喋り方は聞いててストレスが溜まるな

…）

だからと言つて相川が対話を止める訳にはいかない。

交渉は彼の役割なのだ。

「俺達も知らない間にここに連れられたみたいなんですよ

「そりなんですか～。どうしてこんな所に連れて来られたんでしょうね～」

（ここまで何も知らないとなると、今まで誰とも接觸していないんだが…）

「『ゲーム』の為、らしくですよ」

「ゲームですか～。ゲームだったら得意ですよ～」

そつと両手を胸元に持つて行き、両方の親指を忙しなく動かす。

（疲れるな、この人の相手は。文香さんの言つてた呆け老人説もあながち間違いとは言えないな…）

「いや、そういう類いのゲームじゃなくてですね…。…とりあえず、PDA持つてますか？」

「ぴーでーーえー、ですか？」

「これのことなんだが」

機転を利かせて葉月がPDAを見せる。

彼女は葉月のPDAを見ると、何かを思い出したように両手を叩いた。

「もしかして、これですか～？」

「さつと服のポケットからPDAを取り出した。

「それで間違いありません。ちょっと見せて貰つて良いですか？」

「いいですよ～」

即答だった。

相川は彼女からPDAを受け取り、しつかりと握った。

（まさか、ここまで簡単にに行くとはな…）

「もしかして、この機械でゲームをするんですか？」 という間抜けな質問に適当に答えながら、PDAを操作する。

そして、解除条件の欄を表示させた。

表示されていたのはjackのカード。

解除条件は、『自分と24時間以上行動を共にした者が開始から7時間の時点で生存していること』というものだ。

続いて、ルール欄も表示する。

表示されたルールはルール1、2、5、7。

『犯人』の持つPDAの条件には当てはまらない。

相川はすぐに画面を切り替え地図を表示させて、PDAを手渡す。

それはまるで、地図の為にしかPDAを操作してないかのよつた手際の良さだった。

彼女は相川がルール欄と解除条件の画面を見たことにほおそれりへ気が付いていないだろう。

「これがこの建物の地図になります。この建物は六階まであって、ここは一階。現在地は、ええと、ここですね」

相川は人差し指を使って彼女のPDAの地図に直接現在地を指示する。

「そうなんですか～。広い建物なんですね～」

地図を見ながら感心する。

「ゲームの詳しいルールを話さうと思つんですけど……」

相川はこんな通路のど真ん中で、長話といつのも良くないな、と考えていると、少し前に話すのに一度良さそうな部屋があることを思い出した。

「とりあえず、詳しい事を話すのは落ち着ける所に行つてからにしましょ～」

部屋を田指して少し引き返すことにした。

落ち着ける部屋と言つても、段ボールしか物が無いといつ奇妙な部屋だつたが通路の真ん中よりは幾らかマシだつた。

部屋に入ると、とりあえず簡単な自己紹介から始めた。

それによると女性の名前は綺堂渚きどうなぎさといひじい。

相川は渚にルールを説明するのは勘弁して欲しいらしく、文香に後のこと任せ、部屋の隅で壁に寄りかかりながら渚達の話を聞いていた。

(それにしても、jackのPDA…か)

ルール欄のことを考えるとアレが『犯人』に配られたPDAではないだろうが相川本人のPDAであることは否定出来ない。

ルール8もルール9も載つていなかつたのだから。

しかしアレが相川のPDAだつた場合、実は渚が想像よりも遙かに狡猾な『犯人』だということになるが…。

(普通に考えると、あり得ない……よな?)

今もルールの把握に頭を悩ませている彼女が『犯人』であるなどとは想像出来なかつた。

(まあ、jackが俺のPDAでなくともJOKERの可能性もある訳だし、あんまり楽観視するのもダメだよな。やれる事はやつておかないと…)

ゲーム開始から9時間が過ぎようとしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3527o/>

シークレットゲーム～lost lifeline～

2011年10月7日20時36分発行